

私達の生きる場所 完
結

ジト民逆脚屋

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

私達はこの終わってしまった世界で生きていく。

目次

私達の生きる場所	1
トレーダーとして	10
バンディット	20
シエルター	27
コロニー	38
ロックピックと酒	47
パートナー	58
サイコパス	73
狂気	81
統治者	88
決別	95

南

私達の生きる場所	105
南のシエルター	112
マーケット	120
ラックド ラック	127

私達の生きる場所

「大丈夫か？ ムラ」

瓦礫に埋もれた街に二人の男女が居た。

二人共にボロボロの衣服を纏い大荷物を背負い、曇り空の下を歩いていた。

「誰に、言ってるん、のよ。ロデイ」

ロデイと呼ばれた男がムラと呼ばれる少女に振り返り、今の状態を問えば、纏めた銀髪を直しつづつ答える。

言葉に余裕はあるが、手で膝を押しさえ肩で息をしている様子から、言葉通りの余裕は無いのだろう。

ロデイは周囲を見渡し手頃な場所を探す。

「あのアパートで休憩にしよう」

ロデイは近くに見付けた壁に穴の開いたアパートを指差しムラに休憩を促す。

ムラに気を使ってという訳ではないが、ロデイ本人にも疲れはあるし、空も暗くなり始めている。

その上、この世界で拠点も無しに夜出歩くのは自殺行為にしかない。

「分かったわ。あのアパートね？」

「ああ」

「人、居ないかしら？」

「居ないだろうな。入り口が塞がれていない」

ロデイが先行してアパートのエントランスに入り、ムラに状態を伝える。手にはハリガンツールが握られており、襲撃への警戒が強く表れている。

「中はどう？」

「荒らされた後だな。物資は残っていないだろう」

「残念ね。何か残っていたら助かったけど」

「そう言うなよ、ムラ。こういうのは早い者勝ちだ」

無理矢理押し開けられたロッカー、倒された植木鉢、荒らされた管理人室、瓦礫と土砂で歪んだエレベーター。

誰がどう見ても、このアパートには人は住んでいないと分かるし、住める状態ではない。

だが、柱等は崩れてはいない。

「当座、今晚辺りは大丈夫だな」

「そうみたいね」

二人はランタンの僅かな灯りを頼りに崩れかけたコンクリートの階段を昇っていく。向かう場所はアパートの無事な一室。流星にエントランスで寝泊まりする程無用心ではない。

そんな奴は早死にするか、売られるかのどちらかだ。

「私も二度売られるのは御免だし」

「なんか言ったか？」

「何でもないわ」

「そうか」

眩きを漏らしたムラにロデイが問うが、何でもないと返す。

ロデイも聞こえてはいたが、本人がなにもないと云っているのだ。聞こえていない振りをする。

所々崩れた階段に四苦八苦しながら昇り、二階へと着いた。

元はどういう構造だったのか。吹き抜けとなっていて、ランタンで照らすと階下には中庭らしき燃え尽きた痕跡が、薄暗い曇天の下に見えた。

「爆撃かしら？」

「いや、放火だな。爆撃なら、このアパートも吹っ飛んでる」

「それもそうね」

「雨が来そうだな」

「集水器、出しとく?」

「雨の色を見とけよ」

「分かっているわよ。私だつて学習するのよ」

ムラが背負つたリュックサックから折り畳み式の浄水器とパイプ、漏斗を取り出しアパートの剥き出しになった廊下の一面に接地する。

不器用なのか慣れてないのか、接地に少し手間取っていると、雨が降り始めた。

ロディはその雨を見て苦い顔を浮かべる。

「灰色、か」

「どうする? 集水器外す?」

「いや、灰色なら濾過した後には煮沸すれば飲める」

黒でないだけマシだ。ロディはそう呟いた。

黒い雨は濾過しようが煮沸しようが、飲む事も出来ないし下手をすれば触るだけで皮膚が爛れる。

滅多に降らないが、降り始めると何日も降り続けて、最悪の場合はその土地に人は住めなくなる。

「水も残り少なくなってきたわね」

「早くシエルターに着きたいもんだな」

「ラジオ使えるかしら？」

「分かんが、あまり音を出すなよ？」

「電池も少なくなってるしね」

ムラは所々カバーが欠けた携帯ラジオを取り出しチャンネルを合わせ始めた。

灰色の雨が漏斗を叩きパイプを通り、浄水器のフィルターへと滴る音を聞きながら、ロディは夕食の調理に取り掛かる。

「明日はどうしようか？」

「集めた水を煮沸する為の薪を集めるのと、物資が無いか調べるぐらいか」

「・・・バンディットに出会すのは勘弁よ？」

「軍人崩れのサイコパスよりはマシだろうに」

ロディはそう言うと、彼女にライターで軽く炙った干し肉と水の入ったボトルを手渡す。

本日の夕食は草臥れた干し肉一枚とボトル一本の水、これでも今のご時世ではちゃんとした食事の部類に入る。

酷い時は食べられる野草の切れ端や腐る寸前の缶詰、 “一般人” の食事としてはこれでもマシな方だ。

大抵は食事も出来ず餓死するしかない。

そう考えると、自分は恵まれているし恵まれていた。

軍に在籍していた頃は命懸けで敵と戦い、生きて帰ったら温かいシャワーに豪華な食事と軟らかなベッドが待っていた。

命懸けなのは今も変わらないが、やはり自分は恵まれていたと、ムラは思う。

例え、その恵まれた生活の終わりが信賴していた司令官に物として売られるという終わりであっても、あの頃は恵まれていた。

では今はどうか。

敵と戦う訳ではないが、常に何かしら命懸けで温かいシャワーも豪華な食事も軟らかなベッドも何も無い。

物質的には恵まれてもいないし満たされる事も無いが、それでもムラは満足していた。

生きているという実感が今の生活にはある。

「ん？ どうした？ ムラ」

「何でもないわ、ロディ」

目の前で異様に塩辛い干し肉を噛み千切り水で流し込んでいる男ロディ、この経歴も本名も人種も解らない男に拾われてから、ムラは必死に生きて男の技術を吸収してい

た。

ロディはトレーダーと呼ばれる仕事をしている。

物流という言葉が死んで久しいこの世界、トレーダーと呼ばれる者達がその役割を担っていた。

と言つても、今のご時世で車を使える者は軍人等の富裕層に限られ、一般人からなるトレーダーは基本的に徒歩で物資を運ぶ。

その間にも危険は伴う。バンディットと呼ばれる盗賊、退役してまともな職に就かず、自暴自棄になり略奪や殺人に走るサイコパスに狙われる事がある。

バンディットはまだ良い方だ。奴らは生きる為に物資を無人の街や施設から拝借する生き方をしている。

その為、トレーダーを襲つても殺す事は滅多に無いし、交渉次第では物々交換という商談が成り立つ。

だが、サイコパスは違う。

奴らは快樂の為に略奪と殺人をするイカれた連中だ。

ムラモロディと行動を共にする様になってから、幾度となくサイコパスに狙われた。中には、まだまともに理性が働き話を通じる者も居たが、そんな奴は滅多に居ない。

人の頭を撃ち抜く事に快樂を覚えたスナイパー、人間の味を覚えた食人鬼、人の悲鳴

を聞くのが好きなイカれた女、ムラが出会っただけでもまともな頭をした連中は居なかった。

死を覚悟した事もある。だが、そのサイコパス達をロデイは経験で避け、常に提げているハリガンツールで返り討ちにしてきた。

ムラも軍に居た経験から銃も扱えるし殺しの経歴もある。

だがそのムラでも、サイコパスを目の前にすると足がすくむ。

狂気とはこういうものだ、奴らは人の姿で迫ってくる。海で化け物と戦っていた時でも、あんなおぞましい形容し難い恐怖は感じた事が無かった。

「ムラ、ラジオはどうだ？」

「あのね？ 私は食べながら弄ってるのよ？ そんなに早く合わせられる訳ないじゃない」

「口ん中に放り込めばいいだろうに」

「こんな塩辛いのずつと噛んでたら、水がいくらあつても足りないわよ」

その恐怖にもロデイは負ける事無く立ち向かい、勝利し生きてきた。

一体、どういう生き方をしてきたらこうなるのか？

ムラは聞かない。ロデイも彼女の事を詳しく聞いてこない。

それで良い。過ぎた過去に拘っても意味は無い。

互いに話せば聞く、話さなければ聞かない。

この関係と距離感を彼女は気に入っていた。

無論、このままで居られると楽観的に思つてもいない。

どうなるにせよ、このままで居られる訳が無い。

互いの過去を知り別れるか、どちらかが死ぬか、何処かのシエルターで別れるか、彼女がトレーダーとして独り立ちするか、何にせよ何時かは終わりが来る。

それでも、ムラはロデイと二人で生きていく事を選んだ。

あのまま、物として消費されるのではなく、ロデイと二人で苦しくても辛くても人として生きていく事を選んだのだ。

「あく、シャワー浴びたいわね」

「次のシエルターで水道が生きている事を祈るしかないな」

艦娘の叢雲ではなく、トレーダー見習いの人間「ムラ」として生きる。

それが彼女の選んだ道だ。

これはトレーダーと呼ばれる運び屋ロデイと役立たずと売られた元艦娘叢雲でトレーダー見習いのムラが、戦争で終わってしまった世界で生きていくお話。

トレーダーとして

嘗て、戦争があつた。否、あつたというのは正しくないし、今も続いているのだろう。何せ、今の戦争の舞台は海だ。内陸に生きる者達は、それを実感する事は無い。

「雨、止まないわね」

否、無い訳ではない。長年に渡る戦争により、環境は劣悪となり、軍人や政治家に企業家等の富裕層は「コロニー」と呼ばれる自然と文明が残った地区に籠り暖衣飽食を貪り、それ以外の貧困層は「シエルター」と呼ばれる廃墟同然となつた街や集落に追いやられ身を寄せあい、無人の街や施設から物資を漁り生き延びていた。

「水を作れて良いと考えよう」

「それでも陰鬱な気分になるわ。この灰色が何時黒に変わるかとかね」

「笑えん冗談だ」

正義も綺麗事も無い世界で、人々は残り少ない土地にしがみついて生きていた。

「ロデイ、次のシエルター迄はどれくらい？」

「雨が止んでからだが、何もなければ明後日には着くな」

「何もなければ、ね」

「どうした？」

「いやね、そういう何もなければって時に限って、バンディットやらサイコパスに出会すのよね……」

「バンディットならまだしも、サイコパスは勘弁だな」

灰色の雨が降り頻り、アパートの窓の外の世界を薄暗く塗り潰していく。

廃墟しか無い世界、ムラはそれ以外の世界を知っているが、ロディはどうなのだろうか？

彼はこの世界以外を知っているのだろうか？

ムラはランタンの灯りを頼りにラジオを弄りながら目の前の白髪混じりの頭を見る。

初老という言葉が目前に迫ったロディに、ムラが拾われてから一年ちよつとの月日が経つ。

“ある艦娘”の行動が原因で鎮守府始まって以来の大敗北を喫し、その責任を何故かムラが負う事になった。

理由は解らない。いや、解らない振りをした。

本当は解っていた。だけど、信じていた。

戦果を立てられなくなって久しく、後から着任してきた艦娘に追い越され、役立たず

と罵られても信じていたかった。

しかし、ムラの儂い信頼は裏切られ、信頼していた司令官は“あの艦娘”を選び、叢雲は解体され只のムラとしてマーケットに売られたが、不思議と悲しくはなかった。

「ムラ、ランタンの油が切れるぞ?」

「いやこれ、油の吸い上げが悪くなってるのよ」

「予備の紐は?」

「あるけど、今替えたら油が無駄になるわ」

殴られたし蹴られもした。それに自分は女だ。

女が売られ、そういつたマーケットに並ぶという事を理解していたし、覚えさせられた。流石に初めてが品性も知性も欠片も無い様な男だったのは気に入らなかったが、正直な話、どうでもよかった。

鎮守府に居た頃から、自分が死のうが生きようがどうでもよくなっていた。

奴が自分をマーケットに売り飛ばしたのも、実はどうでもよかった。

所詮はそんなものかと、どうせ自分で責任を負う事が怖くなつたのだろうと、マーケットとシエルターの実状もまったく知らないお坊ちゃんかと、色んな事が頭を巡って廻って、今までの自分が馬鹿らしくなった。

何故にあの甘ちゃんを信じたのか。

着任してからの古い付き合いだから？

なんだ、たったそれだけじゃない。

たったそれだけの関係の為に、死にかけて仲間を目の前で死なせた。

嗚呼、畜生。

あいつら全員、死んでしまえ。

鎮守府ごと、爆撃でも砲撃でもされて死んでしまえ。

そうになったら、少しは自分の胸の内も少しはすつきりするだろうか？

そんな事を考えながら、売られるであろう先の仕事を覚えながら過ごしていた。

「雨、止まないわね」

「そうだな」

何時だったか、仕事も覚え一緒に並んでいた者も殆ど居なくなつた頃、表が騒がしくなつた。

何時も騒がしかったが、その日の騒がしさは何時もとは違つた。

どうやら、私が売られたシエルターは人身売買が禁止されていたらしい。

つまり、私の居たマーケットは違法マーケットで、誰かがあのマーケットの存在を告発して、シエルターに住むバンディットによる摘発という名の粛清が始まって、暫くするととても静かになつた。

粛清が終わったのだろう。戦場で嗅ぎ慣れた血と肉が火薬で焼ける臭いがした。

「フィルターの替えてあった？」

「今ので最後だから、材料を手に入れて作らんな」

私も殺されるのだろう。そう思うと笑えてきたと同時に、悔しくなった。

なんで自分がこんな目に？

私はやれる事をやった、充分だ。

ふざけるな。

私は生きてやる。

押し込められていた部屋に据えられていたモップを手に、私は来るであろう死を待ち構え、扉が開くと同時に降り下ろした。

瘦せた男の頭に当たり、苦悶の声が聞こえた。

銃を持っているなら撃たせる事は出来ない。撃たれたら艦娘でなくなっている私は一発で死ぬ。

生きてやる。意地でも生きて、奴らを見返してやる。

その時の私はこれしか無かった。

それだけで充分だった。

一人二人と打ち倒し、マーケットから脱出する。これでも長柄物の扱いには自信が

あつた。

諦めていたから振るわなかったが、そうではなくなつた今は違う。

銃弾が頬を掠める。懐かしい感覚、笑える。

「ロデイ、次のシエルターってどんな所なの？」

「ん？ シエルター同士の交流もあつて、シエルター自体がマーケットになっている」

「へえ、マーケットね」

「言つておろが、あのシエルター自体は小さいからな。人身売買なんぞしようものなら、

一発でバレル」

「そう」

あと少し、あと少しでマーケットから脱出出来る。

その時だ。ロデイに出会つたのは。

モツプは歪んでボロボロになっていたが、まだ余裕はあつた。

だから、迷いなくロデイに向かつて行つた。

真つ直ぐにロデイに降り下ろしたモツプは簡単に避けられ、彼が愛用するハリガンツールの斧刃で真つ二つにされた。

嗚呼、そうか。私が戦つてきたのは海から来るよく解らない化け物で、奴らは攻撃を

食らつても平気だ。

だが、ロデイ達は人間だ。

攻撃を食らわれない事が大前提、私の単純な攻撃なんて不意討ちに近い形でないと食らう訳がない。

私はハリガンツールのハンマーで簡単に気絶させられた。その時に何かを言った気がするが、無意識に出た声だ。言葉にもなっていないかっただろう。

「ラジオ、調子悪いわね」

「シエルターに着いたら、部品探してみるか」

目を覚ますと私の処遇が決まっていた。

私は一瞬何を言われたのか理解出来なかった。

「君の面倒は今日から彼が見るから」

「え？」

「お前みたいなじゃじゃ馬の面倒は、俺ぐらいしか見れんだとさ」

「はい、これ。着替えと当座必要な物ね」

「ちよつと！」

「使い方も歩き方も生き方も、何もかも教えてやる。生きたいんだろう？」

私はあの時、あの瞬間、トレーダー見習いになった。

今もそうだが、あの頃は何をするにも四苦八苦していた。

“コロニー”の外の世界の歩き方、天候の判断、道具の使い方に作り方、食用可か不可かの判断、怪我や病気の判断と治療、ロデイに迷惑の掛け通しだった。

「あ、集水気のボトル換えてくるわ」

「飲むなよ」

「飲まないわよ!」

トレーダーの生き方に少し慣れてきた頃、ちよつとした行き違いでバンディットのチームと争いになった。

私はまだ深海棲艦と戦っているつもりで、バンディットとの戦い方を理解していなかった。

深海棲艦は大群の力押しだが、バンディットは数で囲む。

一人に対し、二人三人で囲み、疲れさせてから仕留める。

折角貰った武器も壊れて、体力も無駄にした。

もう何も無い。殺されるかまた売られるか慰みものにされるか、結局は録な死に方ではない。

変わらず仕舞いか。私が諦めた瞬間、バンディットの一人が倒れた。

何が起きたのかは直ぐに分かった。そのバンディットの額に丸い穴が開いていたから。

一発の銃弾と共に飛び込んできたロデイに、バンディット達はあつという間に倒された。

「無茶をするな」

「……ごめん」

「はあ、まあいい。これでバンディットのやり方は覚えたな？」

「うん、まあ」

「次から気を付けろ」

軽くハリガンツールのハンマーを、頭に落とされたのは痛かった。

「けど、それも生きているから実感出来る事だ。」

「ああ、そうだ。ムラ」

「なに？ ロデイ」

「次のシエルターは、お前がメインで交渉しろよ」

「は？」

「まあ、そんなに大きい取引は無いから大丈夫だろ」

「いやちよつと待ちなさいよ！」

「どうした？」

「いきなり交渉って言われてもね」

「言つたらあ？ 大きい取引は無いつて」

「いや、でも」

「ま、へまする前に手助けはしてやるし、ムラもそろそろ一人で交渉しないと、トレーダー見習いのままだぞ？」

「それは嫌ね」

「だったら、レッツチャレンジだ」

生きているから、色んな事に挑戦出来る。

次は取引の交渉、正直気が重いけど、やってやれない事は無い。

何時までもトレーダー見習いでは居られない。

何時かはトレーダー見習いではなく、一人のトレーダーになって、生きる。生きて奴等に目にももの見せてやる。

バンディット

バンディットと呼ばれる者達がこの世界には居る。

無人となつて久しい街や施設に潜り物資を拾い集め、〃シエルター〃に還元する。

そういつた生き方を選んだ人々、それがバンディットだ。

そのバンディットになるのは簡単だ。

バンディットに資格は要らない。只、ほんの少しの戦闘技術とサバイバル能力、それと〃他人から奪つても良心の呵責が無い事〃。

これらだけが重要視される仕事だ。そこに人柄や人間性は求められない。どれだけ冷酷に確実に物資を獲得出来るか、それだけがバンディットに必要な資格だ。

「砂糖2kgに煙草二箱分に銃と弾丸三セットでどう?」

「悪いが、その条件だと医薬品と包帯は一セットだな」

「二セットにはならない?」

「流石にな、こちらにも医薬品が少ない。後の事を含めれば、値は上がる」

珍しい。ムラは見張りをしつつ思った。

あのロデイが交渉で苦戦しているのだ。

何時もなら、バンディットとの交渉は直ぐに終わらせて、次へ向かう筈なのに今回は違う。

「水ボトルと集水器フィルター四セット」

「医薬品二セット、包帯無し」

フィーリアと名乗るバンディットの女が意外と粘る。

いや、女だてらにバンディットなんぞやっているのだ。

手強いのは当然か。はたまた、何か狙いがあるのか。分からないが、ムラはロデイが交渉に手間取るのを見るのは初めての事だった。

「はあ、どうしてもダメ？」

「ああ、これ以上はまからん」

「どうしても？」

「どうしても、だ」

妙に胸元を強調しつつ、ロデイの顔を見上げる女。

色仕掛けでもするつもりなのだろう。ムラはフィーリアの襟元から覗く色白の谷を見て苛立った。

嫌味か、このアマ……！

だが、そんな色仕掛けが通用するロデイではない。

口の端に嘸んだ煙草を吹かし、フィーリアの色仕掛けを一蹴する。

「やるんなら、もう少し若い奴にやるんだな」

「あら、残念。でも安心したわ」

「・・・何がだ？」

ロデイが一瞬で警戒を強めた。手は腰のハリガンツールに伸ばされている。ムラもロデイから預かっていたハチエットに手を掛ける。

こういう、交渉の途中で妙な事を言い出す輩は大抵、腹に一物抱えていると決まっている。

しかも相手はバンディット、何処かに仲間が潜んでいるのではないかと、ムラは周囲を警戒する。

フィーリアの武器は銃身を切り詰めたライフル。あの手の銃は取り回しが容易で近接戦もしやすい。

まあ、あのロデイの事だ。例え相手が、銃を構え様としても何とかするだろう。

「ああ、そんなに警戒しないでよ。ちよつと、頼み事があるだけだから」

「頼み事だと？」

「よく言えるものね」

そんな二人の警戒を他所に、フィーリアは諸手を上げて降伏の意を示す。

「話すだけは話すわね。この先のシエルターで問題が発生したの」
「なに？」

「この先のシエルターって」

「『ボス』の指示だね。貴方達を連れて来いってね」

「『ボス』？」

フィーリアの言葉、この先のシエルターで問題が起きた。

それはロディとムラにとって予想外であり認めたくない事実であった。

二人は先にあるシエルターに取引をする為に、ここまで来たのだ。

そのシエルターで問題が起きたとあれば、下手をすると取引どころの話ではないかもしれない。

死活問題。二人の手持ちの物資は残り少ない。取引に使う分を入れれば少しは保つだろうが、それでも次のシエルターへ辿り着くには心許ない。

それにフィーリアは二人がシエルターへ向かう事を知って、接触してきた。何が目的かは解らないが、『ボス』なる人物の指示の様だ。

「『ボス』の事なら、貴方達の知り合いよ？ 私も本名かは知らないけど、『ウォルフ』
『ウオルフ』って知ってるでしょ」

「『ウォルフ』？」

「ムラ、お前がああマーケットで一番最初に張り倒した奴だ」

「え？・・・ああ！」

「ワオ！ 貴女、ボスを張り倒したの?! やるじゃない！」

「ちよつ!? 離しなさいよ！」

ロデイの言葉にフィーリアがムラに抱き着く。

ムラはそれに対してもがくが、体格差に技量差もあるのか、一向にフィーリアを引き剥がせる様子は無い。

その様子にロデイは白髪頭からフケを掻き出し、溜め息を吐いた。

シャワーを使ったのは一体何時頃だったか、確か前のシエルターに滞在していた時以来約一週間。

トレーダーやバンディット、シエルターに住む人々なら一週間程度、入浴等をしなくても別段気に留めたりしない。毎日、入浴し体を洗浄出来るのは「コロニー」の住人位なものだから。

不潔とコロニーの住人は蔑むが、シエルターの住人からしてみれば、毎日入浴洗浄が出来る事自体がおかしい事である。

清潔な水がどれ程までに貴重なのか。シエルターの中には、コロニーと同じ様に大規模な湧水地や爆撃で破壊されず機能を残した浄水場を擁するシエルターもあるが、それ

でも安全の為には濾過と煮沸消毒は欠かせない。

その為、シエルターでは飲料用と医療用に使う事を優先し、入浴等の洗浄用に使う事はあまり無い。

フィーリアがボスと呼び、ロデイの友人でもある「ウォルフ」が彼女を使い二人を捜させていた理由は解らないが、嘗てのムラの案件然り、絶対に録な事ではない。

あの時も違法マーケットの物資を好きに持って行って良いというウォルフの話に乗って、違法マーケットを物色していたら「元」艦娘という普通の人間には十分に驚異となる存在が襲い掛かってきたのだ。

さて、どうするべきか。

ロデイは騒ぐフィーリアとムラを他所に思案する。

問題が何にせよ、ウォルフがこちらを連れて来いと彼女使ってきたのが問題だ。

ロデイの目利きでは、フィーリアはかなり腕の良いバンディットだ。

先程の交渉での粘り方からトレーダーとしては一流とは言い難いが、バンディットと兼任しているなら上等と言える。

「ハイ！ Mr. ロデイ！ 早速行きましょう！」

「離せて、言ってるでしょ……！」

フィーリアの小脇に抱えられてぐったりとしたムラを見ながら、試してみるかと吸い

口しか残っていない煙草を揉み消す。

そして、フィーリアに抱えられたままぐったりとうんざりした様子のムラに視線を合わせ、にやりと笑い

「よし、ムラ」

「なに？　今の私の状況分かるでしょ」

「お前、ウオルフと交渉してみろ」

言った。

ムラは開いた口が更に開いた。

「ボス、連れて来たわよ」

「おお、入ってくれ」

重く枯れた声、ロデイとムラがファイリアに先導され訪れた。西のマーケットシエルター、その崩れた街並みの奥に建つ比較的無事な姿で残る三階建ての建物、その一室から聞こえた声の持ち主。ウォルフ、本名かどうかは解らないが、その目や顔付きはトレーダーとして長く生きてきたロデイと同じく隙が無い。

「よう、ウォルフ。久し振りだな」

「ああ、ロデイ。一年振りか？」

ムラは緊張の中に居た。

今から自分がメインとなつて、この男と交渉をしなければならぬのだ。

へまをする前に手助けはすると、ロデイは言ってくれはしたものの、ムラにとって初の交渉が「西のマーケットシエルター」のバンディット、その元締めでありムラが「初めて」暴力を振るつた人間のウォルフなのだ。

緊張しない訳が無い。

「ハイ、ムラ。緊張する事無いわよ？」

「緊張なんかしてないわよ」

「それが緊張してゐるって事よ」

フィーリアの言う通り、幾ら否定しても緊張している事は事実だ。しかし、その緊張の原因は先に待つ交渉だけではないし、相手のやり辛さでもない。

「分かってんのよ。分かってんだけど・・・」

「いきなり小声で、どうしたのよ？」

「・・・ロデイの機嫌が悪いのよ」

ロデイの機嫌が悪い。一年ちよつと行動を共にしていた彼女だから解る僅かな変化。

トレーダーは感情を簡単に表に出してはいけない。ムラがトレーダー見習いとして、ロデイに一番最初に習った事だ。

物資取引を主な生業とするトレーダーが簡単に感情を表に出すという事は、どうぞつ
け込んでくださいと言っている様なものだ。

その言葉通りに、ロデイの感情を読むのは容易ではない。

しかし、幾つか符号めいたものがある。

その一つが

「ほら見なさい。煙草、三本目よ」

「それで機嫌が悪いの？ よく解るわね」

「まあね」

煙草をよく吸う、だ。

ロデイは愛煙家ではあるが、煙草、酒、砂糖等の嗜好品は取引材料になる。

なので、吸つても一本、その日の終わりか大仕事の後、出来る限り減らさない様に心掛けています。

それなのに、この短い時間内で既に三本目。明らかに機嫌が悪くなっている。

その原因は何なのか？

彼女の隣に立つフィーリアか？

否、彼女との取引交渉でも吸っていたが、あれで不機嫌になるとは考え難い。

ならば、ウォルフ？

違う。ウォルフは彼の友人だと聞いているし、ウォルフ自身も彼の癖は知っている筈だ。

まあ、知っていて無視しているという事も有りうるが、頼み事があると言っていた手前、それを無視するとは考え難い。

ムラは記憶を掘り起こす。彼は知っていて理解もしている上で茶化してくるが、彼女は記憶力が良く学習能力が高い。

その上、トレーダー見習いとしてロデイの一挙手一投足から目を離さず観察し、その技術を自分のものとして刻み付けている。

それでも応用力がまだまだなので、ロデイから茶化される。それも気分は悪くないの

だが。

自分が何かした覚えは無い。

このシエルターに来るまで、彼の雰囲気に変化は無かつたし、ムラが何かしても同じ事を何度も繰り返さなければ、ロデイの機嫌が悪くなる事は無い。

ならば何が原因なのか？

ムラに一つ思い当たる事柄があつた。

――なあ、フイーリアー

――何かしら？ Mr. ロデイー

――やけにマーケットに荷が少ないな――

――・・・そういう日なのよ――

――・・・そうか――

――ねえロデイ、あの店少し見てもいい？――

――・・・後だ――

マーケットだ。このシエルターのマーケットの品揃えを見た後、ロデイは不機嫌になつた。

あの時、ムラは出品されていたロックピックの品定めをしようとしていて気付かなかつたが、自分を呼ぶ声が妙に重かつた気がする。

てつきり、初めて見る多種多様なロックピックにはしゃいでいた事を咎められたと思っていたが、実は違った。

ムラには解らないが、ロディはこのシェルターのマーケットに何かあると気付いて、機嫌が悪くなっている。

世間話や近況報告から一向に話が進まないロディとウォルフの会話を聞き流しながら、ムラはフィーリアをちらりと見る。

彼女が見る限り、フィーリアが何かを企んでいる気配は無い。

第一、ロディとムラの様な一介のトレーダーを陥れても利益は無い。ただ、トレーダーが二人消えるだけで、シェルターにもバンディットにも影響しない。

やるなら、ウォルフの様な責任ある立場のバンディットを狙うのが当たり前だ。

そしてこれは、ウォルフにも当てはまる。

ロディは確かに凄腕のトレーダーだが、トレーダー一人が運べる物資は高が知れている。

二人が消えても、不利益も無ければ利益も無い。

それに、ロディがこのこ付いて行くとは考え難い。

さて、マーケットの何がロディの機嫌を損ねたのか。

ムラが考え込んでいると、ウォルフが思い出した様に彼女に声を掛けた。

「やあ、ムラちゃん。久し振り」

「え？ あ！ はい！」

「はあ、ムラ。お前、こいつを一回張り倒しているが、あれはこいつの落ち度だ。緊張する事無いぞ」

「緊張なんかしてないったら！」

「確かに、あれは俺の落ち度だなあ。軟禁されてる部屋にいきなりライフル持った男が飛び込んできたら、誰だつて張り倒す」

「プッフウツ、ボスったら本当にムラに張り倒されたのね！」

「笑い過ぎだ、フィーリア」

ソーリーソーリーと似非臭い英語で謝りながら笑うフィーリアにムラは既視感を覚え、眉を潜めた。

その様子にウオルフは笑みを深くし、ロディは嘆息する。

「やっぱり、解るのかい？」

「ウオルフ」

「いや、すまん。だが、今回の頼み事には、な」

「え？ 何が何なの？ これ」

「ムラちゃん、そこで腹を抱えて上司の過去を笑っているフィーリアは、君と同じ //

艦娘だ」

「え?!」

ウォルフの意外過ぎる言葉にムラは驚愕した。フィーリアが自分と同じ“元”艦娘であるという彼、確かに聞き覚えというか見覚えがある気がするのだが、ムラ自身、あまり他の艦娘に興味が無かったので、解るのかと言われても困る。

だが、フィーリアの容姿や言動には微かにムラの記憶に引つ掛かるものがあるのも確かだ。

しかし、艦娘駆逐艦娘 叢雲の自分にすら興味が無く、自分の姉妹艦とされる艦娘の名前と顔も録に覚えていないムラでは、思い出す事は不可能であった。

記憶に薄らぼんやり残るクソ野郎司令官が、昔に海外艦娘がどうか何か言っていた様な騒いでいた様な気がしないでもないが、何の役にも立たない肉袋司令官が騒いでいた事など覚えていても、記憶容量と脳細胞の無駄遣いなので早々に記憶から消した。

「その様子だと、心当たりはあるけど解らないって感じね?」

「ああ、うん。ごめん?」

「アハハ、いいのいいの。私も一緒よ? 他の艦娘の名前も顔も録に覚えてない、でしょ?」

「そうね。覚えても次の日には居なくなるし、意味無かったわね。まあ、流石に仲が良

かった奴が死んだ時は効いたけど」

「そうよね、私もサラが死んだ時は悲しかったけど、それ以外はいつでもよかったわね」

ハハハと、黒い笑いを溢す二人。どうやら似た者同士の様だ。

姉が、妹が、姉妹が死んだと泣き喚く連中を理解出来なかつたと、艦娘という偽の感情で泣く理由が解らないと、二人は笑い言った。

ロディとウォルフは、その笑いを聞きながら煙草を吹かす。

シエルターに生きる人々にとって、死というものは常に隣に居る。トレーダーの誰かが死んだ、バンディットの誰かが死んだと言つて、悲しんだままで居れば次に死ぬのは自分だ。

まあ、家族や友人が死んだり殺されたりすれば、悲しむし敵討ちもする。ロディとウォルフも経験がある。だがそれだけだ。

そう、それだけ事。死んだ奴が何をしてくれる訳も無し、死んだ奴は土に還り、持ち物は生きている人間が使う。

それがシエルターの常識だ。

「で？ あんたは一体『どれ』だったの？」

「物扱い、貴女のそういう所、大好きよ！」

「そう、ありがと。で？」

「ソーリーソーリー、それじゃ改めて、私は元戦艦艦娘『アイオワ』のフィーリアよ。宜しくね」

「それじゃこつちも改めて、元駆逐艦娘『叢雲』のムラよ。因みに改二迄いったわ」

「OH！ やるじゃない！」

「ま、役立たずだったから売られたけどね」

「私はアドミラルが明らかに身体目当てだったから、『不幸な事故』に巻き込んだわね」
ケタケタと、黒い笑いを一層深くするムラとフィーリア。

未開通？とムラが笑い聞けば、ぼつちり両方開通済みとフィーリアが更に笑い返し、その逆もまた然り。

フィーリアが貴女は？と笑い聞けば、ムラがこつちもぼつちり開通済みと更に笑い返す。

一頻り笑って満足したのか。

フィーリアはウォルフに話を促す目線を送り、ウォルフがそれを了承する。

「親睦は後で好きだけにするとして、話だが、面倒この上無い話だ」

「なんだ？」

「・・・最近な、この辺りのシェルターにコロニーの奴等が出歩いているそうだ」

しかも、*「叢雲」*という艦娘を捜している。

如何にも不愉快そうにウオルフが言うと、ロデイが静かに六本目の煙草に火を点け、ファイリアが腰のスキットルから酒を一口呑む。

不愉快、不機嫌、不快感、様々なマイナス感情が渦巻く中、恐らく当人であろうムラが抱いた感情は

「ふうん、頭がおかしい奴ってサイコパス以外にも居るのね。あ、そうだ。ロデイ、後であのロツクピツクの店に行ってもいい？」

後でロツクピツクの使い方教えてよ。

清々しい程の無関心であった。

コロニー

「ロデイ、私にロックピックの使い方教えてよ」

聞いていて清々しくなる程の無関心、それが元駆逐艦娘叢雲のムラの答えであった。先程のフィーリアとの会話で、大体は理解していたウォルフが、ここまで無関心でいられるのかと、逆に感心してしまう。

嫌悪感はない。

シエルターで生きていれば、他人に関心の無い者は珍しくも何ともない。マーケットのお節介焼きな連中くらいなものだ。他人に関心があるのは。

それに、ウォルフは事前にフィーリアから一つの事を聞いていた。

「ボス、一つ良い？」

「ーなんだ？」

「艦娘になる様な連中は、何処かしら最初から壊れているわよー」

言う通り、フィーリアもムラと似た壊れ方をしている。

「他人を上手く認識出来ない」興味のある人間、好きな人間しかフィーリアは認識出来ない。

それ以外は、顔に名前か役職が書いてある人型としか認識出来ないらしい。恐らく、ムラもそうなのだろう。

「Hey ムラ。貴女も？」

「ごめん。私、貴女みたいにフィーリングやテレパシーとかで会話出来ないから」

「OH! 辛辣ね! ますます好きになったわ! どう? 今晚、一緒にベッドに行かない?」

「アハハ、残念ね。私にそっちの気は無いわ」

「それは残念。天国を見せてあげようと思ったのに」

またケタケタと笑い出す二人。これだけをコロニーの“自称”まともな人間が見れば、二人をサイコパスか何かだと思うだろうが、シエルター住人からすれば“普通”だ。至極“普通”。何も問題は無い。

「ウォルフ、どうするつもりだ？」

考えるウォルフに、ロデイがさして興味も無さげに聞く。

ロデイからしてみれば、今回の件は至極どうでもよくて、至極迷惑な事なのだろう。事実、ウォルフも迷惑している。

コロニー住人、しかも艦娘を捜しているとすれば軍人、そんな者がシエルターを彷徨けばどうなるか。

その答えは簡単だ。

人や物が寄り付かなくなる。

シェルター住人はコロニー住人を忌み嫌い、その逆もまた然り。互いが互いを嫌っている。

そんなコロニー住人が彷徨くマーケットシェルターに誰が来ると言うのだ。

実際問題、このマーケットシェルターに来るトレーダーと物資の数が減少している。

これには、コロニー住人を嫌っている以外に理由がある。

過去にある事件が起きた。

生きとし生けるもの、この世界に息づく過去に比べれば僅かとなった命、それを根刮ぎ枯らし狩り尽くす『黒い雨』があるコロニーに降り注いだのだ。

一日二日降り注いだけなら、コロニーは問題無い。『黒い雨』が地面に染み込み蒸発しガス化する前に、シェルターには無い有り余る清浄な水で洗い流してしまえば良い。

だが、あの日は違っていた。

一日目、当然止まない。

二日目、やはり止まない。

三日目、随分降る。

四日目、おかしい。

五日目、

六日目、

七日目、

一週間降り続いた「黒い雨」はコロニーの大地に染み込み地下水を汚染し、建家や車等のシエルターには無い設備が発する熱で蒸発しガスとなり草木を枯らし、肺腑を腐らせ皮膚が肉が骨が崩れていく。

このコロニーは「黒い雨」に対する対策を何一つ行っていないかった。

このコロニーに降る訳が無い。我々は永遠にこの豊かな環境を享受出来る。

愚かな怠慢が生み出した結果、当然の末路とシエルター住人は感慨無く言った。

だが、愚か者という者は個人でも厄介極まりないのだ。

それが集団となれば、その愚かさは筆舌に尽くし難いものとなる。

そう、住み処を失った住人達は近くのシエルターを襲撃し、その塹を奪い取ろうとした。

何故自分達がお前達と同じ立場にならねばならぬ。

嫌だ。我々は選ばれた者だ。だから、お前達が我々より下に往け。

これにより始まった争いは、案の定泥沼化しコロニー側が遂に艦娘を戦線に投入し、

力業でシエルターを奪い取った。

そして、そのシエルターが現在どうなっているか？

完全な無人となり、トレーダーにバンディット、サイコパスすら近付かぬ最悪の汚染区域となっている。

それは何故か。

シエルター住人が敗戦する寸前に採集していた「黒い雨」を地下水路に流し辺りに振り撒き脱出し、コロニー住人が必死に奪い取ったシエルターは、時間経過により死の街となるだけだったのだ。

洗浄も間に合わない。調子に乗り艦娘を戦線から引き剥がし戦線に穴を開けた結果、深海棲艦による一方的な虐殺が行われた。

「あの事件の二の舞は御免被る」

「そうだな」

この事件により、シエルターとコロニーの溝は埋める事が出来ない程に深くなり、互いに不干渉を貫く事となった。

「で？ 私をそいつらに引き渡すの？」

「そんな意味の無い事をして何になる？」

ムラが問えば、ウォルフが即座に引き渡しを否定する。

シエルターとコロニーは互いに不干渉、この暗黙のルールを破ったのはあつちだ。ならば、こちらが譲歩する必要は無い。

「因みに、艦娘らしいわよ」

「不用心な事だ」

「仕方ないわよ。艦娘なんだしき」

「ふうん、どんな奴？」

「確か、駆逐艦娘で後ろ髪をアップに纏めてたらしいわ」

「・・・そう」

「ムラ、どうした？」

考え込んだムラの顔をロディは覗き込んだ。

しかし、長年トレーダーとして生きているロディにも、その表情は読めなかった。

だが、あえて言うなら「心底うんざり」とした表情であった。

ロディが首を傾げていると、とても深い溜め息が部屋に溢れた。

「はあく・・・何様のつもりなのかしら？」

「ムラ、どうしたの？」

「ああ、フィーリア。私も貴女と同じ事をしてれば良かったわ」

本当に後悔は先に立たずはこの事ね。

ムラは頭を掻き乱し、溜め息をもう一つ吐く。

「ロデイ、煙草ちようだい」

「煙草はやらないんじゃないのか？」

「煙草でもやらないと、やってられないわよ」

「ほらよ」

「ありがと」

ロデイから紙巻き煙草を受け取り、口の端に挟む。

フィルターなんてものは無いから、苦い煙と共に刻まれた煙草葉まで口の中に入り込む。

戯れに舌先に乗った煙草葉を前歯で噛むと、突き刺す様な苦味と渋味が溢れ出し、煙が回ったのか目眩に似た感覚で脳が覚醒する。

「・・・こんなの何が楽しくてやるのかしら？」

「よく言われるよ。で、ムラ」

「はいはい、ロデイ。私の勘が正しければ、私を捜している奴は」

私が売られる原因を作った奴よ。

叢雲ちゃん。

狂気というものは、得てして理解し難く感^う染^っり易い。ゆつくり、ゆつくりとした歩調で少女は廃墟を歩く。

その先に探し人が居ると信じて。

探し人が見付けて欲しいと信じて。

そんな事ある訳が無いのに。

ロツクピツクと酒

「それじゃあ、ムラ。やってみな」

ロデイの言葉にムラは数本の針金を手に、一つの扉の前に立つた。

重厚な造りの扉、それにある鍵穴に針金を二本入れ細かく探る様に動かしていく。

カチャカチャと金属同士が触れ合い擦れ合う音と、彼女の静かな息遣いだけが聞こえる。

ムラとロデイは互いに無言で、ロデイは近くの瓦礫に腰掛け煙草を吹かし、ムラは扉に耳を当て針金が擦れる音を聞いていた。

やがて、扉からカチリと何かが落ちる音がすると、ムラが一息吐いてドアノブに手を掛けた。

「開いたわ」

「ん、時間的にも及第点か」

煙草を揉み消し彼女が開けた扉に近付き、鍵穴を覗き込む。

鍵穴には傷が多く、針金も曲がり幾つかは折れていた。

ロデイは懐から白い布を取り出し、ムラが使った針金を並べていく。

「十本中、四本で済んだか。まあまあだな」

「一体、何本が合格ラインなのよ？」

「折るなど言いたいが、まあ、この間に合わせの針金でこれなら良い方か」

言うのとロデイは針金を布で纏めて片付け始めた。

ムラが見ると黒い先端部が湾曲し膨らんだ管、俗に言うパイプから紫煙を機嫌良く浮かべている。

「随分と気に入っているわね、それ」

「まあな、一々作らなくていいし、何より丈夫だ」

人差し指と中指でパイプを挟み、煙を漂わせる。

何時もの紙巻きより二周り太い管、これがあれば一々煙草の葉を紙に巻く必要は無い。

ロデイは、割りと細かい事を面倒臭がる節がある。仕事の事なら面倒臭がる事は無いが、それ以外だと手を抜きがちだ。

「フイーリアに貰ったんだっけ？」

「ああ、確か『ガングート』とか言う艦娘の艦装か何かの一部らしいな」

「ふうん」

見上げるロデイの顔、頬を斜めに走る傷に刻まれた皺、白髪の多くなり始めた髪。

年月は親子程に離れた二人、この世界で“ちゃんとした親子”など平和で気楽なコロニーくらいでしか見ない。

シエルターでこの二人の様な男女が居れば、つまりは“そう言う関係”だ。

「それで？ その針金どうするの？」

「ん？ こんな屑鉄でもな、鉄である以上は取引に使える」

「え？ そのポロクズが？」

「このポロクズが、だ。まあ、まだまだ取引に使うには足りんがな」

鉄等の金属はシエルターでは貴重品に分類され、物にもよるが高いいレートで取引される。

ロデイも金属の取引を行う事もあるが、彼の専門は医薬品と酒に煙草や砂糖と言った嗜好品になる。

ファイリアはバンディットだが、コロニー時代のコネで銃火器本体や弾薬、稀に艦娘の艦装の一部をシエルターマーケットに流したりもする。

彼女のこれに関しては、あまり快く思っていないトレーダーも多い。だが、コロニーと直接取引をしている訳ではなく、“何故か銃火器や弾薬が不法投棄される廃墟”や“どうしてか解体された艦娘や轟沈した艦娘の艦装が流れ着く海岸”から引き上げてくるだけであり、彼女自身も優秀なバンディットでもある為に多目に見られている。

この「引き上げ場所」に関して彼女は、

「知り合いに話の解る艦娘と人間が居るのよ」

と言っている。

ロデイが彼女から貰ったパイプも、その「話の解る艦娘」の所持品であったが、新しくより質の良い物を手に入れたとフィーリアに流し、愛煙家のロデイに渡ったと言う事だったりする。

「ムラ、酒呑んでみるか？」

パイプを上機嫌に弄りながらロデイが言った。

「ハア、ムラ」

「ハア、ムラ」

「あら、フィーリアじゃない。どうしたの？」

ロデイとムラがこの西のマーケットシエルターに滞在する事になり、ウォルフが宛がったアパートの一室でフィーリアが寛いでいた。

「どうやら、ウォルフに合鍵かなにかを貰っていた様だ。

「ボスからMr. ロデイにつてね。これを」

「おお、手に入ったのか」

「フィーリアが差し出した瓶にはラベルは無く、薄く色の付いた液体が満たされていた。

「お礼はボスにね」

「ああ、すまんなフィーリア」

「ロデイ、それ酒？」

その瓶を指差し、ムラは二人に問うた。

ムラは酒を見た事はあるが、呑んだ事はない。コロニーに居た頃には、何度か呑もうとした艦娘が居たらしいが、生憎ムラはそういった事には興味無が無く、司令官能の尻拭いに「彼女」と走り回っていた。

なので、ムラには酒か否かの判別は付かない。

だが、ロデイがウォルフに頼み入手出来た事を感じていたという事は貴重品であり、液体の貴重品は嗜好品である酒か、液体燃料のどちらかである。

液体燃料をこんな瓶に入れてくる訳がないし、瓶一本分では取引には使えない。

ならば、ムラが知る限りで残る答えは酒しかない。

それもロデイが入手出来た事を感じする程に貴重な代物である。

「御名答。少しは物の良し悪しが解る様になってきたか？」

「馬鹿にしないでよ」

「悪い悪い」

「ふん、それで？ それは酒なの？」

「ああ、しかもとびきり上等な奴だ。俺も二回しか扱った覚えが無い」

「へえ、あのあんたが二回しかねえ」

あのロデイが、長いトレーダー人生の中で二回しか扱った事が無いという酒、飲酒経験の無いムラだが気になる。

だが、ムラに他に一つ気になる事が出来た。

その酒の出所だ。

それ程までに貴重な代物なのだ。フィーリアがいくら優秀なバンディットでも、ウオルフがこの西のマーケットシエルターのバンディット達を纏める役を担っていても、手に入れるのは困難どころの話ではないだろう。

目を細めて瓶を見るムラにフィーリアが、ロデイが口の端に噛んでいるパイプを指差し言った。

「Mr. ロデイのパイプと出所は一緒よ」

「あんたお得意のコロニーの廃品漁りね？」

「と言うよりは、北のコロニーとシエルターの元締めからよ〜」

「なんだと？」

気楽に言うフィーリアだが、ロディは驚愕を隠せなかった。

北のシエルターに取引に赴いた事は少ない。

北のシエルターは山岳地帯に囲まれ気候も厳しい土地だ。そこに行くまでに時間が掛かり過ぎる上に、道中もサイコパスの出没地点が多く安全の確保も難しい。

山に囲まれ厳しい気候に見舞われ、狂人が彷徨く。シエルターもコロニーも迂闊に外に出られない。

そんな環境だからこそ、北のシエルターは他のシエルターと違い、互いが生き残る為にコロニーとズブズブの癒着関係にあったりもする。

「その今の元締めだが」

「そうよ、〃元〃戦艦娘ガングートが今の北の元締めよ〜」

「このパイプの元の持ち主か」

「それはいいけど、その喋り方はなんなの？」

「H A H A H A、ここに来るまでに一本空けちゃった！」

妙に間延びした喋り方をしていたフィーリアは、ここに来るまでに酒を一本空けてい

たそうだ。

あまり顔に出ないのか、そう言われれば顔が赤い様にも見える。

「空けちゃったって、あんたね。頼まれた物を勝手に空けたの？」

「大丈夫よ、私が空けたのは途中でマーケットで仕入れた安酒よ」

こんな良いの空けないわと、ムラの糾弾に空になった小瓶を懐から出す。

ボロボロのラベルには三日月が描かれていた。

「ムーンシャイン」か」

「あとは「サマゴン」しか無かったのよ」

「「サマゴン」か。俺もあれはな」

「少し苦手なのよね」

ムラの放つて続けられる話に、彼女は面白くない顔をしつつもフィーリアの傍らに置かれた酒瓶から目を離さない。

それを見たロディとフィーリアはニヤリと笑い、グラスを三つ用意する。

その小さなグラスに半分程、薄く琥珀色に染まった液体が注がれ、ムラの前に差し出された。

「え？」

「呑んでみな。お前も酒を知っておいた方が良い」

「そうね、トレーダーにしるバンディットにしる、やっていくなら酒と煙草は知っておいの方が良いわ」

「そう……」

差し出されたグラスからは、甘い様な辛い様な複雑な香気が立ち上り、ムラの鼻を刺激する。

消毒用アルコールとは違う香り、ムラはそれが入ったグラスを軽く揺らし、一気に口に入れた。

「……っ?! つは!」

「一気に呑むからだ」

「その酒を一気に呑む奴は初めて見たわ」

「それなら、早く言いなさいよ!」

酒精が喉を焼く感覚に噎せ込むムラを二人は笑い、ムラがそれに叫ぶ。

二人は喚くムラに新たなグラスを差し出す。

「何よこれ、さつきより色が薄いじゃない」

「呑んでみな、違いが分かる」

「ん? さつきより甘い様な?」

「正解、水を入れたのさ」

ムラに手渡されたグラスには、先程より水で薄められた酒が満たされていた。

ムラはそれをチビチビと舐める様に呑みながら、二人を見る。

「いやしかし、まさかな」

「本当よね」

「仕入れた本人が言うか？」

なんと言うか、羨ましい。

ムラの胸中には小さな羨望が芽生えた。

自分では「まだ」こういった酒が似合う事はないのだろう。

だが何時か、ロデイの、彼の隣で酒を呑み交わす時が来るのかもしれない。

その時自分は、一人前のトレーダーに成れているだろうか？

だが今は、そんな不安より

「ちよつと二人共、それ私に呑ませる酒でしょ！」

「お？ 呑むか」

「当たり前でしょ！ ほら、フリーリアもそれ寄越しなさいよ」

「OH！ ムラ、強引ね！」

「ありや？ もうやってたのか」

「遅いぞ、ウォルフ」

今は、目の前にある滅多に味わえない酒だ。

「さて、全員揃ったな。では、ムラがロツクピツクの使い方を覚えた記念と、これから起きる厄介事に」

乾杯。四つのグラスが打ち鳴らされる音が狭い部屋に響いた。

パートナー

“トレーダー” ロディは考える。

元艦娘のムラを拾い、変わった自分の今まで。

北のシエルターの一つに生きて、母も父も誰も知らず、物心ついた頃には既にトレーダーとして生きていた。

正直、自分は運が良かった。死なず売られず、五体満足のまま、トレーダーとしての知識と技術を身に付け、今を生きているのだ。

運が良いとしか言い様が無い。

運良く一人で、トレーダーとしてシエルターを転々とし、居着いたとしても一年足らずの根なし草を続けていた。

時が経ち、髪に白いものが混じり始めた年になり、そろそろ拠点となる場所を定めて、根を下ろす事も考え始めた矢先、友人のウォルフから違法マーケットの取り締まりの仕事が舞い込んできた。

マーケットに違法も合法も無いが、“表”のマーケットでは人身売買は絶対に禁止されている。

人を買いたければ、**「裏」**のマーケットへ行け。帰つて来れるかは保証しないが。

あのマーケット摘発は、元締めとなる者が急死してしまい、空席となつた場所に**「裏」**からの流れ者が居座つたという事らしく、そのマーケットは最早**「表」**なのか**「裏」**なのか分からない灰色と成り果てていた。

「裏」から逃げてきた半端者がやらかしたツケを**「表」**の人間が払うとは、なんとも可笑しな話ではあつたが、あのまま放置すればあのマーケットは信用を失い、人も物も寄り付かなくなつていた事は確実だ。

だから、疑惑が外に漏れる前に消す。

それがウオルフ達の出した結論であつた。

ロデイとしては、録に立ち寄らない小さなマーケットの一つであり、無くなつても何ら問題は無いと言えた。

しかし、こう言つた**「裏」**から逃げてきた半端者は実に厄介極まりない。このマーケットが潰れたら次のマーケットへ、伝染病や黴の如く移っていく。

何処かで止めねば、辺り一体が腐り落ちてしまう。そうなつてからでは遅い。

だから、彼も摘発に参加する事にした。

と言つても、ロデイはバンディットのウオルフとは違い、戦闘を専門にはしていないトレーダーだ。

後の事も考え、後詰めで逃げ出した奴等を取り押さえる役割を買った。

その方が楽そうだったし、何等かの物資を手に入れられる可能性があった。

実際、手に入れたのは物資でも何でももないものだったが。

ロディは紙巻きを口の端に挟み火を着ける。傷み形が崩れて取引には使えない煙草だが、味には問題は無い。

紫煙が頭に回り、当時の風景が甦る。

連中は中々にしごとく、此方の被害もバカにならなかつた。

お陰で後詰めの方の自分まで、面倒な事になつた。

網を抜けて来た連中の相手をしなければいけなくなつた。

ロディは戦闘の専門家ではない。

戦う事も出来る行商人だ。戦闘を専門とするバンディットのウォルフ達には一歩も二歩も劣る。

身に付けているのは自衛の為の武力であり、それで喰っていける程のものではない。

だから、戦闘屋の相手をしろと言われても困る。

それでも、やらなければ死ぬので、愛用のハリガンツールで応戦し生き残つた。

ウォルフ達が暴れている様だ。逃げ出してくる奴等全員が、非戦闘員か怪我人かのどちらかだった。

何人が相手をしていると、人の動きが止んだ。

「どうやら、終わりが近付いている様だ。」

もういいだろうと、マーケットに残る物資を探り始め、一時間足らずだが充分に満足出来る量の物資を手に入れた時、マーケットの奥から叫び声が聞こえた。

「まだ生き残りが居たかと思ったが、どうにも様子がおかしい。声がどんどんこちらへ近付いて来ている。」

腕利きのバウンサーでも居たのか、はたまたサイコパスでも飼っていたのか。

バウンサーなら話は通じるだろうから、ここまでの騒ぎにはならない筈。なら、可能性として高いのはサイコパスになるが、この連中がサイコパスを飼えるとは到底思えない。

だとすれば、一番可能性が高いのは

「あ、あああああああつー！」

第三者による予定外の襲撃。

念の為、ハリガンツールを片手に構えていたロデイ目掛けて低い体勢で駆けて来たのは、小柄な銀髪の少女だった。

少し驚いたが、人身売買が行われるマーケットで、この年頃の少女や子供が居るのは『売れ筋の商品』なのだから不思議でも何でもない。

ロディは少女が突き出してくる先の割れた箒を避けた。

明らかかな急所狙いの一撃。戦闘、特に殺しに慣れた者の動きだ。

「うあ……！」

「ちっ！」

流石に面食らったが、殺しに慣れた子供はシエルターでは珍しくない。恐らく、仕事か何かでミスをして売られでもしたのだろう。

人を簡単に殺せる攻撃を避け、ロディは少女が振るう箒の柄をハリガンツールの斧刃で叩き斬り、体勢の崩れた頭に槌頭を落とした。

「……！」

少女は気絶し、マーケットの奥から額を割られたウォルフが顔を出した。

解った話を聞く限り、この少女は「売れ残り」らしい。

「どうする？」

「何がだ？ ロディ」

「このガキだ」

「珍しいな、お前が」

珍しい。確かにそうだと、自分でも思う。トレーダーとして生きてきた今までの人生で、他人の生き死ににここまで興味を持ったのは初めてだった。

「もう少し、連中から話を聞き出してからになるだろうが、悪い様にはならんだろうさ」
「そうか」

いや、生き死にというよりは、あの面食らった目と言葉か。

ロディはハリガンツールを握る手を見る。

皺と傷だらけの手だ。担架に乗せられ運ばれていく少女の手も似たようなものだった。

「ウオルフ。あのガキ、俺に寄越せ」

「はあ？ お前、そういう趣味だったのか？」

「馬鹿を言うな。先ず話をしてからだ」

「はいはい、分かりましたよつと。．．．．一人旅に疲れたのか？」

「．．．さあな」

似ている気がした。

嘗ての自分に、生きる為に目の前に立ちはだかる壁を無理矢理越えようとするバカなガキ。

「ロディ」

「なんだ？」

「一人に疲れたら、無理はするなよ？ トレーダーにしろバンディットにしろ、そうなっ

た奴は早死にする」

「知ってるよ」

こう言うバカなガキは、早目に何かを教えないといけない。

そうしないと、周りを巻き込んで盛大に自爆する。

面倒だが、たまにはいいだろう。

自分だって同じだったのだ。なら、同じ事をするだけだ。

ロディは二本目の煙草に火を着け、それから事を思い出す。

少女が目覚める前、マーケットの生き残りから聞き出した話によると、あの少女は

コロニー”からの横流し品で、元艦娘だった。

今日日、”コロニー”からの横流し品がマーケットに並ぶのは珍しくない。

北のシエルターでは当たり前に並んでいる。それが、物だろうが人だろうがだ。

そして、少女を狙っていた女術屋^{ぜげんや}達も、少女が元艦娘と知り、蜘蛛の子を散らす様に

居なくなった。

当然だ。元艦娘なんて厄介事、余程の物好きか相当に腹の太い取引先を持っている連

中だけだ。

「あ・・・」

「目が覚めたか？」

「()は？」

「俺が借りた部屋だ」

少女は落ち着かない様子でキョロキョロと辺りを見回すが、見ているのは扉や窓の位置とロデイとの距離だ。

あの一撃と言い、マーケツトでの日々による疲労と軽い飢餓に脱水まで起こしながらこれとは、元艦娘と言うのは話に聞くより中々に面倒な質らしい。

「あんたは？」

「トレーダー、ただの行商人だ」

「名前を聞いているんだけど？」

「名を聞くなら自分からと、コロニーでは違うのか？」

「私は叢……いや、もう名無しよ」

「そうか。俺はロデイだ」

「名無しの理由、聞かないのね」

「シエルターじや名無しなんぞ珍しくもない。名有りの方が珍しい」

そう、と呟いて銀髪の少女はまた黙った。

ロデイも何も言わない。

無言が部屋を支配してから暫く、扉を叩く音が飛び込んだ。

「なんだ？」

扉の隙間から顔を覗かせたのは、マーケット摘発に参加していたバンディットの一人でロデイとは顔馴染みの男だった。

「その娘の始末が決まった」

ロデイの背後、銀髪の少女が始末という言葉に反応した。

「内容は？」

「お前の好きにしろだとき」

「そうか、頼んでおいた物は？」

「揃えてる。もうすぐ持つてくるだろう」

男が扉を閉めた。

少女は何が何やら分からない様子だったが、自分に害が無いと判断したのか、動きは無い。

「さて、お前さんの始末についてだが」

「娼館にでも売る？」

「お前がそれで良いなら、売るが？」

「冗談よ。二度も売られるのはゴメンだわ」

少女が鼻で笑う。

どうやら、自分の身を不幸と嘆く気も無いらしい。諦めていると言うよりは、受け入れているに近い。

今までコロニーからの横流し品になった者達を何度か見てきたが、その全員がコロニーに戻せと叫び喚いていた。

「それで、私はどうなるの？」

「ああ、それだが」

ロデイが言葉が続けようとした時、部屋の扉が乱暴に開かれた。

「なんだい、ロデイ。あんた、まだ居たのかい」

「居たら悪いか？」

「どつちでもいいよ。だが、そろそろ出ていきな。風呂に着替えにやることは山程あるんだ」

乱暴に扉を開いたのはロデイが部屋を借りている娼館の女主人であった。酒や香水等の類いを優先的に回す代わりに、安く部屋を借りている。

元はコロニー出身らしいが、彼女の過去を知る者は居ない。

その女主人の背後からぞろぞろと、ロデイとも顔馴染みの娼婦達が服や桶、布切れを持って現れた。

「ハの子？」

「あのロディが面倒見る子」

「あーあー、もう。髪傷んでるじゃない。かけたらかけっぱなし、洗いもしないとか三流以下だったみたいね」

「と言うかさ、仮にも売り物に手を出すって、チンピラ以下よね」

「ちよつと、なにを？」

「ほらほら、大人しくして。うええ、髪だけじゃなくて服もカピカピのベトベト。盛った犬かよ」

戸惑う少女を他所に、娼婦達はテキパキと準備を進めていく。

「それじゃ、頼んだ」

「ちよつと、あんた！」

「君の面倒は今日から彼が見るから」

「は？」

「お前みたいなじゃじゃ馬の面倒は、俺しか見れんだとさ」

「はい、これ着替えと当座必要な物ね」

「ちよつと！」

「使い方も歩き方も生き方も、何もかも教えてやる。生きたいんだろう？」

少女が気絶する直前に呟いた言葉

——死んでたまるか……！——
諦めている者なら言わない言葉だ。

生きる為に目の前に立ちちはだかる壁を無理矢理越えようとする目と生を望んだ言葉。
月並みだが、ロデイが少女の面倒を見ようとする決め手がこれだ。

シエルターでは生きた者が正義だ。

ロデイが部屋から出ようと立ち上がった時、少女の服を桶に詰め込んでいた娼婦が聞いてきた。

「ねえ、ロデイ。この子に名前有るの？」

「私は名無しよ」

「ムラ」

「え？」

「ムラ」でいいだろ。さつき、そう言ってたしな」

「それは」

「嫌なら自分で考えろ」

紙巻き煙草を口の端に挟み火を着け、部屋を出る。

生きているんだ。名前の一つや二つ、自分で考えられる。

そうして、ここからロデイとムラの二人の旅が始まった。

最初は苦勞したと、ロディは紫煙を吐き出す。

バンディットに突っ掛かっていたり、サイコパスの巢に迷い混んだり、散々な目に遭った。

反面に、ムラの元艦娘としての勤に助けられる事もあった。

まったく面倒な事だが、悪くない日々になった。

「ロディ、何やってんの？」

「ん？ ムラか。準備だ」

「そう、でもそろそろよ」

「そうか」

「ねえ、ロディ。次のシエルターはどんな所なの？」

「南のシエルターは、そうだな。言ってしまうえば、物が豊かなシエルターだ。中々、交渉に手間取るな」

「そうなの。それじゃ、面倒事は早く済ませましょう」

「いいのか？」

ロディは目の前に行くムラに問う。

「なにが？」

「仮でも、元同僚だろうか？」

「どうでもいいわ。今は私の邪魔をしているイカれ共よ」

「まあ、それもそうか」

「そうよ。もう私は『叢雲』じゃなくて『ムラ』なの」

「あ、おい」

ムラはロデイから煙草を奪うと彼の真似をしてか、口の端に挟んだが、すぐに顔をし
かめた。

「にが・・・よくこんなの吸ってるわ」

「返せ。まったく、じゃじゃ馬は治らずか」

「余計なお世話よ」

ムラが舌を出して反論する。

それを見ながらロデイは、次に寄るシエルターで交渉を全て任せてみるかと考えてみ
る。

上手くいけばよし、上手くいかなくてもムラも素人ではなくなっている。最悪の事態
は避けるだろう。

先に行く、短槍を持った銀髪の少女の背が最初よりも大きくなったと思うのは、自分
が年を取ったからか。

これが終わったら、ムラに酒を奢ってみるか。

ロデイは腰に提げたハリガンツールを撫でながら、ムラの隣に並んだ。

サイコパス

廃墟、瓦礫、廃材、おおよそ不要とされるものが色を失う荒れ地に、幾つかの影があった。

「叢雲ちゃん・・・」

眩く声に、「叢雲」と呼ばれた少女は両目を伏せたまま反応を示さない。

「・・・叢雲ちゃん」

「・・・」

空は何時もと変わらぬ曇天、呼び掛けは止まず、その呼び掛けに応える言葉は無い。

あるのは、

「しつこいわね」

否定と拒絶の意志と言葉だけだった。

彼女の言葉に、少女は思わず一步後退るが、直ぐにまた言葉をぶつけた。

「叢雲ちゃん！ コロニーに帰ろう！」

「・・・しつこいわ、本当にしつこいわね。あんた、私を誰と勘違いしてるの？」

「えっ？」

少女が目を見開き、目の前の銀髪の少女を見る。

銀髪の少女は、片目を閉じて残る目を鋭く、己の名を言い放った。

「叢雲、叢雲、私はその叢雲とかじゃないわ。私はトレーダーの「ムラ」よ」

銀髪の少女「ムラ」は、過去と決別する為、己を過去に引き摺り戻そうとする少女に向けて、はつきりと言い放った。

「そんな、なんでそんなこと・・・、あなたは叢雲ちゃんだー！」

「はあ、話にならないわね」

だが、それでもと食い下がる少女に、ムラは溜め息と共に髪を掻き上げ、その目に意思を込めて短槍を突き付け、

「・・・はつきりと言うわ。迷惑なのよ。コロニーの住人が、シエルターを彷徨かなくくれる?」

明確な決別の意思を叩き付けた。

「私はトレーダーのムラ、あなたは艦娘。そして、コロニーとシエルターは互いに不干涉が鉄則よ。あんたの勝手な都合に、私達を巻き込まないでくれるかしら」

「そんな、どうして?」

「どうして?」

少女の言葉にムラは眉をひそめた。隣に立つロデイが目を向けてくるのも構わず、ム

ラは睨みを返す。

彼女の脳裏に、嘗ての過去が甦る。己が、壊れた己が唯一認識していた「彼女」の最期の姿。

理不尽に壊された肉体、不条理に奪われた精神、そして二度とは会わぬ魂。

その全てを引き起こし、全ての原因となった者が、何故どうしてと問うてくる。ムラの短槍を握る手に力が入り、両の目を一度伏せる。

「……沈んだ敵も助けたい」だったかしら？」

「っ……っ！」

目を伏せたままのムラ言葉に、俯いた少女が顔を上げる。

希望が灯った目を見せるが、その先に佇む少女が浮かべる表情は少女の希望を全て否定するものであった。

「ふざけるのも大概にしろ！」

「え？」

「何その顔は？ 理解されてると、少しでも思ってたの？ どんだけ都合の良い頭してんのよ？ あんたのその訳の解らないイカれた考えで、『あいつ』は死んだんだ！」

ムラは、一度息を吸い、意思を込めた目を向ける。

敵意と拒絶、決別の意思を。

正面、悶える様にして頭を両手で抱えている少女が居るが、ムラはそんな事は知ったことではないと、一步踏み出し叫びを挙げた。

「あんたのその馬鹿みたいな、現実を見ていない考え方が、『あいつ』を死なせて、他の連中まで死なせた！　そして、あんたはのうのうと生きて、私にコロニーに帰ろう？」

「叢雲ちゃ……」

「ははは、舐めた口もここまでくると笑えるわね。ねえ、電？　『叢雲』と『あいつ』は死んだの。あんたが殺したの」

一度目を見開き、俯いたまま動かなくなった少女を一瞬一瞥し、

「……ふん」

最早興味も無いと、黙し俯いたままの少女に背を向けた。

「ムラ、いいの？」

「もういいわ。終わった話が蒸し返されただけよ」

煙草を口の端に挟んだロデイに、ムラが人差し指と中指を開いて突き出す。

「売り物なんだがな？」

「私が作った方が見た目が良いから売れるでしょ？」

ロデイは紫煙を緩く吐き出すと、懐から少し錆の浮いたシガレットケースをムラに渡した。

ムラが渡されたケースを開くと、草臥れた煙草が数本、バンドに纏められて収まっていた。

「ん」

「ほらよ」

ムラはその中の一本をくわえると、顎をしゃくる様にしてロデイに向ける。ロデイが古ぼけたライターで火を点けると、鼻につく匂いが曇天昇っていく。

「ああ、苦い苦い」

「ヘイ、ムラ」

「なによ？ フィーリア」

「彼女、いいの？」

フィーリアがライフル片手に指差す先には、瓦礫が転がる荒野に俯いたまま佇むセーラー服の少女が居た。

「いいもなにも、私には関係無いわ」

「ま、それもそうよね」

腰のスキットルを煽ったフィーリアが銃身を切り詰めたライフルを肩に担うと、ムラは背後に視線を送る。

「ーなにかしらね？ この感覚ー」

嫌な、背筋や首筋を這い回る感覚。それを背後に佇むセーラー服の少女から感じ取った。

艦娘として、トレーダーとして生きてきた経験から、他に誰かが潜んでいる気配は無い。

「ムラ、どうした？」

「ちよつとね」

短槍を握る手に力が込もっているのが解る。異様だ。

「ロデイ、フィーリア、行きましょう」

「ああ」

一刻も早く、この場を離れた方が良い。ムラの勘が叫んでいた。

二人も同様の様で、フィーリアはライフルを、ロデイはハリガンツールを手に構えている。

「ムラ」

「ええ、ロデイ」

解る。解る事がある。否、ムラは気付いていた。

俯き下がった前髪に隠れて、唇がなにかを呟く様に忙しなく動いている。先程迄も、明らかに目がおかしかった。

てきつと待ってる知ってる？司令官さんが新しい“彼女”を建造したのですだから今度は大丈夫大丈夫なのですさあ帰ろうよここいつらを皆殺しにして」

「“電”……！」

ムラが短槍を少女“電”の喉を狙い突き込み、ファイリアがライフルの引き金を弾く。

決別が始まった。

狂気

軋みをあげる体を折り曲げながら、ロデイは前を見た。拳か蹴りか、戦闘を主眼としていないロデイには判断出来ない。

だが、受け止めたハリガンツールから伝わる衝撃、大柄なロデイを軽々と吹っ飛ばす力、それらは全て目の前で顔を伏せ、嗚咽の叫びを漏らし続ける少女が艦娘だと示していた。

「ロデイ、動ける?」

「・・・動けなければ、死ぬだけだ」

言つて身を起こす。まだ骨に痺れは残っているが、今はそんな事を言つていられる場合ではない。

「あ・・・!」

電と呼ばれた少女、バレッタで留めた髪が解け、両手で覆い隠した顔を更に隠す。

俯いたまま、その表情は何い知る事は出来ず、耳に残る呟きに似た音が、両手の隙間から漏れ聞こえている。

「ハイ、ムラ。アレどうしたのよ?」

「解んないわ。けど、コロニーの頃から狂っていたわ」

三人が見る先、電が顔を隠していた両手を外した。

顔を上げる事無く、俯いたまま髪で隠した顔はどこを見ているのか。ムラには確信がある。

「フイーリアー！」

叫びと動きは同時だった。ムラが叫び、電が動いた。

艦娘という、人間を遙かに凌駕する膂力を用いた強引な接近、ムラが短槍で薙ぎ払おうにも瓦礫が邪魔をして振り抜けない。ロディは少し距離が空き過ぎている。

電は俯いたまま、緩い貫手を作り下から抉る様にして、フイーリアの腹部に向けて撃ち込んだ。

普通ならばダメージにすらならないであろう攻撃だが、電は艦娘。人間を檻糶雑巾の如く引き裂ける膂力を持つ。元艦娘であり、人間よりも耐久力の高いフイーリアであってもまず耐えられない。腹部が貫かれるか、引き裂かれて二つに分かれるかだ。

フイーリアは元艦娘の反応速度を以て行動した。

まずは距離を取る。元戦艦娘の膂力は多少衰えたとは言え、人間のそれとは比べ物にならない。

大きく一步分を確保、ライフルを持つ手とは逆、左手で腰から大型ナイフを逆手で抜

き打つ。

狙うは電の右手、艦娘の艦装から削り出して作ったこのナイフなら、軽巡や重巡クラスは厳しくても駆逐艦クラスなら手首を刈れる。

そして、そのままの動きで側面に回り頭を撃ち抜けばいい。

フィーリアはその通りに動いた。

動き、一瞬で判断を変え、電の範囲内から飛び退いた。

「ひ、あ……」

「この……!」

飛び退いたフィーリアが逆手に構えるナイフが、俯いた電の右手首の形に丸く削れていた。

舌打ちと共に、フィーリアがライフルを電に向けると、小さななが二人の間に落ちた。

「フィーリア! ムラ! 離れろ!」

ロデイが叫び、動きを止めた二人の間に投げ込んだ円筒状のものから、煙が吹き出し電から三人を隠した。

「は、ひ……」

辺り一面を満たす白煙に染み込む様に漏れ聞こえている嗚咽から、三人は一度退き体

勢を立て直す為に、荒野に並ぶ廃墟へと走り抜けた。

「ムラ、なんだ奴は？」

「二度目ね。狂っていたけど、あんな訳の分からない状態じゃなかったわ。…私が知っている限りではね」

言つてムラが背後に視線を送る。壊れた窓枠から窺える様子は、白煙が風によつて消え、いまだに俯いたままの電が立ち尽くしていた。

「ムラ、あまり出ない方がいいわよ」

「そうね」

「だがしかし、どうする？ 奴は異常だぞ」

ロディの言う通りに、ムラが拒絶の意思を叩き付けたのをスイッチに、電は突如と変貌した。

髪を解き、両手と髪で俯かせた顔を隠し、攻撃してきた。その攻撃力が異常だった。

「駆逐艦娘の力じゃなかったわよ」

元戦艦娘のフィーリアが、抉れたナイフを片手に窓から外を窺う。

フィーリアの膂力は艦娘には勝てない。だが、元戦艦娘の膂力は並の相手を圧倒出来る。彼女の使う大型ナイフも、彼女と同じ戦艦娘の艤装を削り出して作ったもので、電が艦娘と言えど駆逐艦娘の力では、この様に削る事は不可能な筈なのだ。

「割りと気に入ってたのに……」

フィーリアが切っ先に刃が残るナイフを眺めていると、切削跡に何かが付着している事に気付いた。

それは、赤黒いというよりも青黒い、半ば乾いた液体だった。

「……これって、深海棲艦の？」

「どういう事だ？ 奴は艦娘の筈だろう」

「そうよ。だけど、これは深海棲艦の血の色よ。なんであいつから……」

三人で見るナイフの切削跡に、赤が混じった青黒い液体が貼り付く様に乾いていた。

艦娘や人間は赤、深海棲艦は青。ロディは詳しく知らないが、元艦娘であるムラと

フィーリアは知っている。

これは奴等の血だと。

だがその場合、何故電からこの血液が付着したのか。

ロディとフィーリアは、眉をひそめるムラを見た。

「……噂は本当だったって事かしら」

「噂？」

「私が居たコロニーで、少しの間だけ流れていた噂よ。艦娘と要らなくなった艦娘や深海棲艦を混ぜて、更に強い艦娘を造り出そうとしてるってね」

ムラが語る噂、それは強い艦娘を更に強くする為に、強い艦娘に不要な艦娘や捕まえた強い深海棲艦を混ぜているというもの。

フィーリアも似た様な噂を聞いた事があるらしく、気味の悪そうな顔で頷いていた。「私が知ってるのは、一部の性能が低い艦娘に、その性能が高い艦娘を混ぜて、性能の高い艦娘にしているって話ね」

「何処も似た様な話があるのね」

「だとするとだ。奴をどうやって仕留める？ ただでさえ艦娘というだけで手を焼いているんだ。そこに混ぜ物をしているんだらう？」

ロデイの言葉に、二人が頷く。

こちらの戦力は人間が一人に元艦娘が二人、あちらは艦娘が一人だが、その中身に問題がある。

一応、ウォルフに援軍を頼んではいるが、人間の援軍では犠牲者が増えるだけだ。

逃げようにも、ムラ達が逃げてても、奴は追ってくる。

どうにもならない。

「あの様子だと、再生してるわね」

「深海混ぜてるなら、再生もするわね」

「……一つ聞きたい。コロニーで、黒い雨が降った時、深海棲艦はどうしていた？」

ロデイが周囲を警戒しつつ、簡単な地図を広げた。

地図には、今三人が隠れている廃墟とその周辺のシエルターの位置が記されていた。

「どうしていたって、奴等も『黒い雨』に長く打たれば死ぬわ。それがどうかしたの？」

「いいか、ムラ。ここ近くには、水源に『黒い雨』が降った壊れた浄水施設がある。その貯水池には、降り積もった『黒い雨』が何年も貯まり続けている」

「そこに、奴を叩き落とすって訳ね」

「即死はしないだろうが、貯まった『黒い雨』は粘性を持つ。それも年月が経てば経つ程にだ。そして、あの貯水池は俺が知る限りで、二十年以上は排水されていない」

「落ちたら出られないわね」

三人は頷く。正面からでは勝てない。ならば、確実に殺せる方法で殺す。

方針を決めた三人が、浄水施設にある貯水池を指して動き出し、

「ひ……いあ……」

それと同時に、三人の耳にくぐもった嗚咽が届いた。

統治者

「やあ、噂は聞いている。良い面構えだ」

ウォルフが治める西のマーケットシエルターに、客人があつた

その客人は、部屋に迎え入れたウォルフの顔を見るなり、整つた顔を喜びに歪めてそう言つた。

「そりやどうも。北のシエルター総代、イヴェノヴァさんよ」

客人、北のシエルター総代、イヴェノヴァは、長い銀髪を手で払い、喜びの表情を更に深くした。

「ふむ、私がイヴェノヴァだとは言つてなかつた筈だが、どこからかな？」

「家の小飼いのバンディットだ」

「フイーリアか。奴も口が軽いな」

くつくつと笑うイヴェノヴァ。元戦艦娘「ガングート」である彼女は、北のシエルターとコロニーを全て支配する総代として君臨している。

彼女が北を統べる武器は元戦艦娘としての膂力でも、そこで培つた戦闘技術でもない。

「さて、西のマーケットシエルター総代よ。私の縄張りを荒らした不屈き者はどこに居る？」

「耳が早いな」

パイプを口の端に噛み、紫煙を燻らせる。

イヴェノヴァ最大の武器、それは情報収集能力。艦娘時代からの部下や同僚、引退した後の仲間。

それらを利用し、東西南北各所に存在するシエルターやコロニーに密偵を紛れ込ませ、シエルター、コロニーの人口、建築物の数に質、水路水源浄水施設の有無、マーケットの品揃えや品数に店数、出入りのバンディットやトレーダー。果ては道端に転がる石ころの数まで、兎に角徹底的な情報収集を行い、それらを最大限に用いて、イヴェノヴァは北のシエルターとコロニーを己の支配下に置いた。

「ふん、そろそろ東のコロニーを呑み込もうとしていた矢先、彼奴らがやらかしてくれたからな。腹も煮えるものだよ」

「北に続いて東までもか。強欲だな」

「くくく、欲とは活力だ。欲が無ければ、何も成せんよ」

「然りだな」

欲とは活力であり動力源である。何かを食べようと飲もうと、何かを欲するのも、生

きようとするのも、何もかも全て欲があるから出来る。

それが二人の、シエルターに生きる者達の総意だ。

「しかし、欲も過ぎれば毒となる。まあ、教えてやろう」

「へえ、何をだい？」

「とある東のコロニーの話だ。ああ、とあるトレーダーの弟子が居たコロニーの話だ」

「ほう、気前が良いな」

「なに、サービスだ。気にするな」

イヴェノヴァが紫煙を吐き、切れ長の目を細めてウオルフを見る。和やかな雰囲気纏ってはいいるが、ウオルフは北でも名を聞くバンディットだ。

最近ではバンディットとしては動いておらず、この小さな西のマーケットシエルターの統治者として動いている様だ。

だが、名の通るバンディットと問われれば、必ず名の挙がるバンディットである気配や眼光は期待通りだと、イヴェノヴァは内心で喜んでいた。

「そのコロニーでは、ある実験を行っていた。艦娘と深海棲艦を混ぜ、更に強い兵力を得ようとな」

ウオルフは何も言わず、目を細め葉巻に火を点ける。

それを見た後、イヴェノヴァは続けた。

「より強い兵力を得るといふ意味では、その実験は成功した」
「とうとうと?」

「くくく、笑い物だぞ? 混ぜる割合によつては精神と肉体が、深海にやられるらしくてな。艦娘が深海棲艦となつて、結局そのコロニーは滅んだよ」

パイプを片手に、イヴェノヴァはまたくつくつと笑う。

心底愉快で仕方がないと、イヴェノヴァは笑つた。

「ー嗚呼、やっぱりの男欲しいなー」

内心に喜悦を刻んで、その上でウオルフを見た。

油断無く己を見るウオルフを得る事が出来れば、西のシエルター支配への足掛かりに出来るだけでなく、支配下の更なる発展に繋がる事が容易に想像出来る。

それだけの器量と実力、人脈がこの男には眠っている。

「で、その滅んだコロニーの生き残りが彼奴か?」

「ああ、そうだ。艦娘にも深海棲艦にも成りきれない、中途半端な存在。それが、厄ネタでな」

「それが、ムラの」

「そうだ。それが奴が唯一認識していた姉妹艦の仇だ」

イヴェノヴァは欲に忠実だ。欲しいと思つた相手は何としても手に入れる。

だが、例外もある。

「そうだな。サービス。サービスついでのサービスだ。深海棲艦の簡単な殺し方を教えよう」

「ほう、そりやなんでだ？」

「彼奴を仕留めようと、人を集めているだろう？」

「やはり、耳が早いな」

イヴエノヴァの例外は、単純に利益だ。

ウォルフは、己の手元に置くより、取り引き相手とした方が利益となる。そう判断した。

「さて、奴等は二種類の装甲を持つ生物だ。一つは先天的装甲である『甲皮』、二つは後天的装甲の『艦装』だ」

「ふむ」

「『甲皮』は私達の皮膚の様に、高い柔軟性を持った鋼板だ。艦装は貴様も知っている通りに、装甲であり武装でもある」

まあ、私達で言う爪か。イヴエノヴァは紫煙を眺め、ウォルフに言った。

「爪ねえ？」

「まあ、爪や皮膚云々は例えだ。あまり気にするな。本題の殺し方だが、『甲皮』に罅を

入れて焼夷弾で焼けば、簡単に殺せる。奴等、中身の耐久性は人間とそう変わらんからな」

「焼夷弾、ねえ。そんな上等なもの、このシエルターには無いな」

「良い、良い話だ。この付近には、*“黒い雨”*が貯まった浄水施設があるだろう？」

「*“甲皮”*に傷を付けて、沈めりゃ殺せるか」

「それだけでなく、沈めれば呼吸も止めれるから確実だ」

ウォルフは灰皿に葉巻を押し付け、正面で脚を組むイヴェノヴァを見る。

自分達の内情すらも手の内に収める北の総代、その彼女を信じるなら、この情報を今すぐ伝えるべきだ。

だがその前に、ウォルフには確認しておくべき事がある。

「二つ聞かせろ。イヴェノヴァ、お前何が目的だ？ 支配下に置こうとしていたコロニーの一つが潰された程度で、お前が直に動く理由にはならない筈だ」

ウォルフの確認の問いに、イヴェノヴァは両手を一度打ち鳴らし、勢いをつけて両横に広げた。

「なに、言っただろう？ サービス、サービスだよ。これから、長いか短いか判らぬが、良いビジネスパートナーとなるだろう相手に対する、心ばかりのサーヴィスだ」

イヴェエノヴァがパイプを嘔んで笑むと立ち上がり、部屋を後にする。ウォルフは呼び止めず、その背中を見ていた。

決別

判断は一瞬だった。

フィーリアは瞬時に、欠けたナイフを声が聞こえた方角に投擲、背後を見ずに走る。投擲の動作で体勢が崩れたとまではいかないが、それでも若干は崩れている。それによる遅れを取り戻す為に、元戦艦娘の膂力で無理矢理な加速を行うが、それでも相手は現役の艦娘。生体としての性能が違う。

「ひい……あ」

顔を隠していた両手を自由にしながら、頭は頸椎が折れた様に前に垂れ下がり、艶のある茶の髪が悲嘆の嗚咽を漏らす表情を隠して見せない。

そんな不安定極まりない姿勢で、電はムラ達三人に追い付きつつあった。

「くっあ……！」

電が体を独楽の様に回し、体ごと振るつた無造作な手刀ともピンタともつかない中途半端な一撃。それは、朽ちかけたコンクリートを抉りながら、フィーリアに迫った。

フィーリアはそれを体を捻り避ける。無理矢理な体勢に捻った為、喉から苦悶の音が漏れるが、彼女は己の体の負担を無視して、回転により振れた電の横腹に銃弾を叩き込

む。

「フイーリア頭下げる！」

ムラがフイーリアに指示を出すと、電の体がズレた。

「重い……！」

ロデイが体を限界まで捻って振り抜いたハリガンツールによる打撃で、電が己で抉り脆くなった壁に埋もれ、一度動きを止めた。

「これはおまけよ！」

「今の内だ！ 退くぞ！」

電を縫い付ける様に、ムラが力任せに投げた短槍を見送り、瓦礫が崩れる音を尻目に、三人は目的地の浄水施設へと駆けた。

「ムラ、なんだあの重さは？ ハリガンツールが曲がるかと思つたぞ」

「混ぜものの影響でしょ」

「艦娘は基本、筋繊維密度と骨格を弄ってるけど、あの体重は混ぜものしかないわ」

「面倒な、話だな」

ロデイが僅かに乱れた息で返事を返す。

年齢の割りには、頑強な肉体を誇る流石のロデイでも、元艦娘二人の全力に着いていくのは辛いものがある。

普段の旅路では、長年の経験から消耗の少ない歩き方や道の選び方に体の運び方、それらを駆使して今のこの歳まで現役のトレーダーを続けている。

「ムラ、奴は追ってきてるか？」

「後ろに姿は無いわ」

「Mr. ロデイ、浄水施設まであとどれくらい？」

「このペースで走ればすぐだ」

ハリガンツールを肩に担い直し、背後に視線を送る。

廃墟からは、かなりの距離を離れている。だが、相手は艦娘。人型の化け物、それも今回は混ぜものをした化け物の中の化け物。

「見えた！ 浄水施設だ！」

「急ぐわよ！ 奴が来てる！」

三人は背後から迫る気配に、走る脚を更に前へと出した。今追い付かれれば、ここで全滅してしまう。

ウオルフが援軍を寄越す手筈になっただけだが、西のマーケットシエルターからここまででは少々距離がある。

「ロデイ！ 例の貯水池は?!」

「施設奥！ 浄化槽の手前だ！」

浄水施設の扉をムラが蹴破り、ロデイが現在位置を確認、フイーリアが後詰めで一路浄化槽手前を貯水池を目指す。

「こんな狭いところで、奴に会いたくないわね」

「まったくだ。と、マスク着けろ」

三人は防毒マスクを着けながら警戒を続け、狭い通路を走る。二人並ぶのが精一杯の通路で、あの電と出会す事は避けたい。

朽ちかけていたとはいえ、仮にもコンクリート製の壁を容易く抉る様な奴だ。狭い通路で鉢合わせすれば、ムラ以外、否、アレに最早正常な判断能力が残っているとは思えない。ムラを含めて全滅だ。

「幸い、ここに曲がれば目的地だ」

「あとは、ここに誘き出すだけね」

三人が貯水池へと続く最後の曲がり角を曲がった時、先頭を行っていたロデイが驚愕の声を出した。

「・・・嘘だろ」

黒い、ひたすらに黒い池。まるで、底から何かの手招きをしていると錯覚してしまう程に黒い池があつた。

汚水を浄化する為の機械すらも、這い回り染み込み黒く染めた池。だが、ロデイが驚

愕したのはそれではない。

「……どうなってるのよ？」

「きいひ、あひあ……」

最早、嗚咽なのかすらも判別出来なくなつた声を、俯いた顔から漏らす電が、貯水池へ続く作業用のキャットウォーク、その中央に立つていた。

それだけなら、ただ立つているだけなら、誰も足を止めなかつた。赤が消えた青黒い血を滝の如く、胸部左側から流していた。

フィーリアが撃つた銃弾ではない。それは、ムラが力任せに投げ込んだ短槍だった。

ムラの短槍は偶然か、電の心臓を貫いていた。元駆逐艦娘全力の臂力で投げ込んだ短槍は、艦娘の皮膚を破り、肉を穿ち骨を砕いて心臓を貫き、背から飛び出している。確実な致命傷。艦娘でも、心臓や脳を破壊されれば死ぬ。その筈なのに、電は立っているだけでなく、三人を追つて、三人よりも先にこの貯水池に到達している。

異常。ロデイがハリガンツールを握る手に力を籠める。

サイコパスやクスリのせいでネジの外れたバンディット、死にくい奴らは嫌になる程見てきた。

だが、こんなものは見た事が無い。

何を思ったのか、電が突き刺さつた短槍の柄を掴み、抱き寄せる様に石突きを上へと

押し上げる。肉が骨が柄の動きにひしゃげ抉れ、最早液体と呼べない塊のような血を傷口から吹き出し、キャットウオークに広がっていく。

青黒く染まった短槍の穂先が、青黒い海に沈んだキャットウオークに当たり金属音が聞こえ、全員が動きを止めた。

「あ、はああひ、・・・叢雲ちゃん」

「ホント、おかしいのは頭だけにしなさいよ」

「むら雲ちゃん。ねえ司れい官さん、叢くもちゃんなのでス」

肺に傷が入ったのか、空気の漏れる音と共に、まるで己の右隣に誰かが居る様な仕草を見せる。

「ほら、ムらくもちゃんなのデス。司令カンサン」

「・・・ロデイ、予備あるでしょ?」

「ほらよ」

ロデイが何時だったか暇潰しに作った、壊れた警棒を再利用した仕込み槍を受け取ると、それを一振りし伸ばす。暇潰しの手慰みで作ったものとはいえ、ロデイ手製の仕込み槍は手に馴染んだし、なんの問題も無い。

「フイーリア、撃って」

「随分優しいのね?」

「まさか、徹底的に潰しておきたいだけよ」

「来るぞ」

己を貫く短槍に、身を添わせるように、電は短槍を軸として回り、瞬時にロデイの懐に入る。

だが、ロデイは自分が狙われると分かっていた。

電はムラを叢雲として、自分達から取り戻そうとしていた。そして、叢雲ムラに一番近かった異物はロデイだ。

「きひい……！」

「悪いな」

短槍を軸に、血を撒き散らす独楽の腕が飛んで、直下の黒い池に落ちた。

「面倒が掛かる弟子が居るんでな。まだ死ねん」

動きを読んでいれば、ロデイでも手負いの艦娘の腕なら落とせる。

だが電は、斧刃に叩き割られる様にして絶たれた右腕を見る事無く、穂先に火花を散らし回り、追撃を加えようとする。

しかし、そこにロデイは居ない。

「フイーリアー！」

「オーライ、M r. ロデイー！」

フイーリアに合図を送り、銃声が合図と同時に響く。

着弾は金属音、フイーリアは電の右隣の空白を撃った。

外す筈の無い距離で、フイーリアはわざと電の右隣を撃った。

誰も居ない右隣を。

「あああああシレいかンササさんん！」

だが、狂った電にはそこに誰かが居たようだ。肘から先が無い右腕を伸ばし、虚空を搔く。

そして、

「シレいかS、A・・・！」

「しつこいのよ、あんた」

上がった顔を、ムラが貫いた。

斜めから顎を割り、頭蓋を砕いて脳の破片を撒き散らす。

俯いたまま、髪影に隠れていた顔に、以前の面影は無く、青白い肌に青黒い血が流

れ、仕込み槍により貫かれ飛び出た眼球には、複眼の様に瞳が幾つもあり、それがそれ

ぞれにムラを見ていた。

「ム濃雲あウちやオんりんやん・・・」

「・・・もう二度と、現れるな」

ムラは仕込み槍を捻り込み、穂先を割れた頭蓋に引つ掛け、そのまま電だった何かの首を折った。

硬質な、繊維質の音が薄暗い貯水池に響いた。

「うあ、うお・・・」

「私は「ムラ」よ。イカれ女」

何が言いたかったのか、口から漏れた声は言葉にならず、ただ息と唇が動く音になるだけだった。

そして、ムラは渾身の力を両足に籠め、力無く垂れ下がる肉塊を、キャットウオークから直下の黒い池に突き落とした。

粘性の水音が届き、何かもがく様な音もしたが、直ぐに治まり、黒い水面には波紋一つ無く、ただひたすらに黒い水面が静かにあった。

「・・・さよなら、意味は無いけど仇は取ったわよ」

防毒マスクを外し、ムラはシガレットケースから草臥れた煙草を取り出し、紫煙を虚空へと吐いた。

「苦い苦い。あんた、苦いの嫌いだったわね」

「深雪」。

ムラの眩きは誰にも届かず、薄暗く空も見えない世界に、ムラ以外誰も知らない名前

と共に消えた。

私達の生きる場所

薄暗い曇天の下、廃墟を歩く影が二つある。

「平気か？ ムラ」

「誰にも言つてんのよ、ロデイ」

先を行くロデイが、後を着いていくムラに振り返り聞くと、言葉通りに余裕のある少女が見えた。

以前とは違い、力や体力に任せて悪路を進むのではなく、ロデイと同じ様に足を掛けやすい足場や、消耗の少ない歩き方で、瓦礫の山を歩いている。

「ロデイ、次の南のシエルターはどんな所なの？」

「俺もあまり行つた事は無いが、『黒い雨』が降りにくい気流らしくてな。物資も豊富で、コロニーに近い環境のシエルターだ」

「そうなの。で、目的は？」

ムラの問いに、ロデイは口元を軽く三日月にする。勿論、ムラには見えない様に。目的地だけでなく、そこでの目的にまで目端が利く様になつていた。

トレーダーとして、少し成長した証拠だ。

「砂糖だ」

「砂糖？ 他のシエルターでも手に入るじゃない」

「南のシエルターの砂糖は質が良いからな。良い取り引き材料になる」

ムラに双眼鏡を渡し、ロデイは適当な瓦礫に腰を下ろす。背に負っていたリュックを下ろすと、額に浮いた汗を拭う。

「休憩？」

「これからが長いからな。休める内に休んでおけ」

「そうね。少し暑くなってるし、水飲む？」

「ああ」

ロデイもムラも、いつも着ているコートを脱いでリュックに突っ込んでいる。

ロデイの言う通り、冷涼な気温が景色が変わる毎に温暖な気温に変わっていくのが解った。

ムラから水のボトルを受け取り、水を口に含むと、何かを思い出した様にムラに問うた。

「そうだな。ムラ、温泉って知ってるか？」

「オンセン？ なにそれ？」

「地面から湯が湧いてるのさ」

「はあ？ ロデイ、まだ呆けるには早いわよ？ お湯が湧いてる訳ないじゃない」

双眼鏡で辺りを見回していたムラは、ロデイが呆けたのではないかと疑う。ムラにとつて湯は、水を沸かしたものであり、湧水のように地面から湧いてくるものではない。呆けたロデイが、湧水を湯だと勘違いしているのではないか。ムラが疑いの目を向けていると、パイプで額を小突かれた。

「人を呆け老人扱いするとは、偉くなつたもんだな？」

「だって、ロデイが湯が湧いてるとか言うから」

「事実だ。地下水よりもずっと下に熔岩があると、その熱で地下水が沸く。それが湧き出したのが温泉だ」

「ふくん」

ムラが草臥れた煙草を口に挟み、紫煙を吐く。

「どうやら、興味が薄い様だ。」

「ま、南のシエルターに着いてからのお楽しみだな」

「お楽しみ？　なんでよ？」

「本当にものを知らんな、お前は」

「いいじゃない、教えなさいよ」

パイプに刻み葉を詰め火を点けてから、ロデイは地図をリュックから取り出し見せ

る。

「南のシエルターは、水脈や水源が豊富でな。気候も温暖で『黒い雨』も滅多に降らない。引退したトレーダーやバンディットが多く住んでいる土地だ」

「で？ それは何の関係があるのよ」

「水が豊富という事はだ。沸いた湯を冷ます為に水が使えるという事でな。風呂に入り放題という事だ」

ロデイの言葉にムラが目を剥く。

「いやいや、ロデイ。そんな事ある訳ないじゃない」

「くくく、それが本当にそうなんだ。あと、水も使い放題だ」

「ますます信じられないわ・・・」

煙草を口に挟んだまま呆けるムラ。それが可笑しくて、ロデイは笑った。あの艦娘との一件以来、ムラは感情を表す事が増えた。元から感情豊かではあったが、どうにもズレていたり、僅かだが機械的な面もあった。

それが気に入った他者以外をまとも認識出来ないという、ムラ自身のものからくるものなのか、元艦娘という生体の特性なのか。ロデイには解らない。だが、今のムラの兆候は悪くない。

トレーダー云々より、人間としてそれがあるべき姿だ。

「まあ、行ってみれば分かるだろう」

「そうね」

言つてムラが煙草を揉み消し、瓦礫の向こう側の空に動くものを見た。

「ロデイ、あれなに？」

「なにつて、なんだあれは？」

二人が見上げる空には、楕円形の巨大な風船にボートを貼り付けたものが浮いていた。

よく見ると、それには翼と回転するプロペラが付いていて、分厚い雲の海を悠然と進んでいく。

「あれはまさか、『飛行船』つてやつか？」

「『飛行船』？ なにそれ？」

「俺が若い頃に聞いた話だがな。東のシエルターの更に東の海の果てに、ここよりも発展した大陸があつて、そこではあんなデカイものが、当たり前前に空をとんでいるんだと」

「おとぎ話が実は本当だったつて事？」

「みたいだな」

ロデイが燃え尽きた刻み葉を棄てると、荷物を纏め始めた。ムラはその様子を見て、答えが解りきつた問いを問う。

「どうするの?」

「あの進路を見る限り、奴の行き先は南だ」

「もしかしたら、南のシエルターに降りるかもしれないって?」

「それもがあるが、見てみる」

ロデイが指差す先に、幌の付いた車を中心にした集団が南に向かっているのが見える。

ムラはあれは何なのかと、ロデイを見る。

「『キャラバン』だ。まだやってるシエルターがあつたのか」

「『キャラバン』?」

「トレーダーが集団で、大口の取り引きをする時に、護衛にバンディットやバウンサーを雇う。その集団が『キャラバン』だ。かなりの物資や金が必要から、俺が若い頃に廃れたと思っていたが、まだやってるシエルターがあつたんだな」

ロデイが荷物を背負う。ムラもだ。

二人は南に向かう二つへと歩き出す。

「『キャラバン』ともなれば、余剰分の物資も積んである筈だ。ムラ、交渉してみな」

「あら、いいの? ごっそり頂くわよ?」

「くくく、やってみる」

分厚く薄暗い曇天の下、瓦礫の転がる悪路を歩く影が二つあった。嘗て、戦争があつた亡びかけた大地を二人は進む。

まともなものなど殆ど無い。イカれて狂つた世界。

そんな世界でも、生きる為に二人は歩いていく。

ここが、自分達の生きる場所だと。

南

南のシェルター

金糸銀糸が湯に漂い、湯気に手が泳ぐ。

「フイーリア、これって現実？ それとも、夢？」

「ムラ、現実よ」

「マジか〜」

だらりと体を温もりに投げ出し、柔らかな浮力に任せて身を浮かせる。

数多くの傷が刻まれた、均整の取れた肉体が僅かに濁った湯の海に露になる。

「ああ、ヤバイ。ロデイが言ってた意味が分かる・・・」

「Mr. ロデイ？」

「南のシェルターに来た奴は、必ずここに住みたがる」

「OH！ それ、ボスも言ってたわ」

フイーリアが水音を立て、空を見上げれば、北や西や東ではあまり見れない青空が広がっている。

身をずらし背後へ視線を落とせば、日光が降り注ぐ大地に、規則正しい緑の列が刻ま

れている。

「あれが、畑ってやつね」

「ムラは初めて?」

「個人でやつてるのは見たわ。けど、あの広さは初めてよ」

「まあ、ちよつとしたマーケツト並みだしね」

湯に浮かべていた桶から、丸みを帯びた金属を取り出す。

フィーリアは、その蓋を捻ると、中身を一息に煽った。

「いい酒ね」

「私にも寄越しなさい」

「アアン、強引ね」

「いい酒を独り占めは許されないわ。それに、強引にされるの、嫌いじゃないでしょう?」

「ムラにだけよ。貴女、強引だけど上手いんだもの」

フィーリアがしなを作り艶のある視線を送れば、ムラは彼女から奪い取ったスキツトルを煽る。

「煙草が吸えないのが、ただ残念ね」

「ムラもすっかりスモーカーね」

「私だった全部は終わったし、後は『私』の好きな様に生きるだけよ」

尖った八重歯を見せつける様にして、ケタケタと笑う。

何処か貼り付けた様な印象は消えていないが、過去にフィーリアが見た笑みとは違い、今は以前より人間らしい笑みを浮かべている。

「て言うか、ムラ飲み過ぎ」

「いいじゃない。どうせ、まだ桶に突っ込んでる癖に」

「それは取って置きよ。酔って味が解らなくなりたい？」

「あら、早く言いなさいよ」

フィーリアに軽くなったスキットルを返し、腹に溜まった熱を全身に巡らせる様に、細く長い均整の取れた肉体を伸ばす。

「Mr. ロディは？」

「北の総代と話中」

「ワオ、胃が痛くなりそうね」

「そう？」

ムラが首を傾げ、フィーリアを見る。

自分とは違う肉感的な体が、白く濁った湯に隠れている。

温泉と酒精により、白い肌には赤みが差しており、普段とは違う生きた柔らかさを、視

「さて、話をしよう」

「二介のトレーダーに聞ける話ならな」

静寂が包む酒場の隅、二人の男女が向かい合つて座つていた。

一人は年季が刻まれた初老の男、一人は銀の髪に不敵な笑みの女。

トレーダーのロデイと北のシエルター総代イヴェノヴァ、酒場には二人しか居ない。

「くくく、良いな。実に良い」

「ウォルフにしろお前にしろ、統治者というのは話がくどい」

「ビジネスパートナーと話をしたいというのは、当然の話だろう？」

琥珀色が満たされたグラスを傾け、イヴェノヴァがロデイに視線を向ける。

傷と皺の刻まれた顔、最早灰色と言つていい頭、年齢を感じさせない体軀。トレー

ダーでなくとも、バンディットやバウンサーとしても、十分に通用するだろうと見てと

れる。

「ビジネスパートナーねえ？ ただのトレーダーに、北の総代が何を望む」

「君達の活躍」

「話が見えん」

ロデイが紫煙を吐く。ロデイはあまり長く商談を続けるタイプではない。

長く商談をしても、纏まらない話は纏まらないし、時には纏まる話も纏まらなくなる。

勿論、その逆もあるが、ただのトレーダーでしかないロデイには、応えられる依頼には限度がある。

「デカイ話なら、ウォルフに頼め。あんたの資本金とあいつの人脈があれば、キャラバンの一つや二つ運営するのは容易いだろう」

「いやいや、伝説級のトレーダーである君の名を借りたいのだよ」

「言った筈だ。ただの一介のトレーダーだと」

ロデイはただの一介のトレーダーだと、自分を位置付けている。

ただ、誰よりも長く生き延び、誰よりも長くトレーダーを続けているだけのロートルに過ぎない。

何処かのシェルターに、隠居していてもおかしくない年齢なのだが、今も現役を続けている。

ただそれだけなのだ。

「謙遜する。その年齢まで、現役の人間がそう居るものか」

イヴェノヴァが唇を吊り上げ、紫煙を浮かべる。

「内容は簡単だ。飛行船を見ただろう？」

「ああ、作り話だとばかり思っていたがな」

「現実だ。その飛行船が、今回の仕事に関係する」

「なんだ？」

懐から数枚の資料を取り出し、ロデイに向ける。

何やら戦力図らしきものが記されていたが、ロデイにはらしきものとはしか検討がつかない。

なので、これがどうかしたのかと、視線をイヴェノヴァに送る。

「どうやらな、向こうでは戦争は終わったらしい」

「ほう？」

「飛行船を使用した高高度からの大質量絨毯爆撃、これにより海域の深海棲艦を駆逐。くくく、海域の環境が変わるまで繰り返したらしいぞ？」

「で、それが何の関係がある」

「話は簡単、それだけの資本力を持つ相手、商売相手に欲しくないかね？」

イヴェノヴァの言葉に、ロデイは溜め息を吐く。

「悪いが、他を当たってくれ」

そして席を立ち、酒場の扉へと歩みを進める。

ドアノブに手を掛け、捻る。外の明かりが酒場に漏れた時、イヴェノヴァの声が聞こえた。

「まあ、考えてくれ。君と、あの彼女とっても悪い話ではない筈だ」

「そうか」

「ああ、後、これはサービスだが、このシエルターで煙草を取り引きするなら、東側のマーケットは避ける」

「そりゃ、なんでだ？」

「東側の畑、隠しているつもりだが、あれはクスリだ。艦娘にもガツンと効く、な」

ドアノブに手を掛けたまま、ロデイは首だけイヴェノヴァに向く。

「忠告感謝する。だが、何故だ？ 一介のトレーダーに、何故ここまで肩入れする？」

「簡単な話だ。私は欲しいものは必ず手に入れる。そして、サービス。そう、未来のパートナーに対するサーヴェイさ」

くぐもったイヴェノヴァの笑いを背に、ロデイは酒場を後にする。

気のせいか、肩が重い。

温泉に浸かって休みたい。

「もう歳か？」

その前に、ムラとフィーリアに合流しなくては。

ロデイは建ち並ぶ楼閣の、猥雑な呼び込みを無視しながら、湯気の森へと向かった。

マーケット

マーケットというものを、ムラは幾度となく経験してきた。だが、ムラが経験してきたマーケットの雰囲気とは、何もかもが違っていた。

「なに、これ……?」

不可解、理解不能、初見、判別不可、今まで見た事の無い物品の数々が、山のように積み上げられ、濁流の様に取り引きされていく。

この光景は一体何なのか。理解の限界を超え、呆気にとられ、呆けた顔で立ち尽くすムラの背を、強い力が叩いた。

「ムラ、仕事だ」

「いや、ロデイ。解ってるけど、これなに?」

「野菜だ。……コロニーで見た事は無かったのか?」

「無いわ。野菜って、こんな形だったのね」

丸い、葉が幾重にも重なり合い、球を形作った野菜を手に取り、興味深げに眺める。手には確かな重みと爽やかな瑞々しき、それが初見のムラにも確かに「本物」だと理解させる。

「それは適当に千切って、塩を振って食うとイケる」

「サラダね」

「洒落た言い方をするじゃないか」

コロニーに居た頃は、毎日の様にきらびやかな食卓に、新鮮な肉や野菜が調理されて並んでいた。

だが、コロニーでもシエルターでも、これ程に瑞々しい野菜を見たのは、初めての事だった。コロニーでは調理済み、他シエルターでは萎びてもつと色が濁っていた。

「この変なものも食べれるの？」

「ん？ ああ、食える」

極彩色の世界を、ムラは歩いていく。歩を進めれば進める度、新たな発見をしては、足を止めて眺める。

色鮮やかな野菜や果実、異臭も無く虫も集っていない肉類、シエルターの常識が崩れて去る光景だった。

「凄いわね……」

「これが、南のシエルターだ。つと、ここだ」

マーケットを進むロデイが足を止め、狭い路地へと入っていく。

「ちよつと、ロデイ」

「ムラ、こつちだ」

狭い路地から続く廃墟を越えて、マーケットから離れた辺鄙な場所に、それはあつた。マーケットに並んでいた店とは違う。コンクリート造りの建屋に並ぶ、純白と褐色と黒が詰まつた袋。そこには、医療品と並んで高値で取り引きされる砂糖があつた。

「これって、砂糖よね？」

「そうだ。言つたらう？ 南のシエルターには、良い砂糖があると」

甘い、砂糖が放つ独特の匂いの中を進み、奥にあるカウンターに置いてあるコーンベルを鳴らす。多種多様な砂糖が放つ甘い匂いは、服や髪に染み着きそうで、夜にフィリアに何か言われそうだと、ムラは眉間に皺を寄せた。

「ムラ、今日は顔見せもあるからな？ 機嫌よくしとけ」

「分かつたわ」

「まあ、このシエルターに居る間は、風呂に入り放題だ」

己とフィリアの関係を知つてか、ロデイが欠伸混じりに言う。今の御時世、性差による差別というのは、いまいち無い。

強ければ生きる、弱ければ死ぬ。ではなく、生きる奴が生きて、死ぬ奴が死ぬ。それが कोरोニーの外の世界、シエルターの絶対ルールであり、そこに性別は関係無い。

故に、差別するのが無駄であり、余計なものを抱え込む奴は早死にする。

ムラとフィーリアも、そういった関係だが、互いに互いを見捨てる事も厭わない。シエルターや外の世界に生きる者は、生き残った者が正しく勝者なのだ。

「しかし、遅いな」

「誰が？」

「店主」

ロデイが煙草を喫おうと、古ぼけたライターを取り出した時、横からライターがかつ拐われる。

何事かと、ムラが手が伸びてきた方を見ると、柔らかな笑みを浮かべた女が居た。

「ロデイさん、ここは禁煙です。砂糖に臭いが付いたら、どうするんです？」

「あ、ああ、済まん。『ツツカー』」

白い女がライターを片手で弄び、ロデイへと返す。

「まったく、もし火を点けていたら、店に出している砂糖、全部買い取ってもらいましたよ。」

「……ツツカー、恐らく次からはコイツが、商談相手になる」

「はい？」

ムラの背を押し、ツツカーと己の間に出す。長身のロデイよりも長身で、体格も良いツツカーは、体を折り曲げてムラを見る。

「ふうん、ツツカーです」

「……ムラよ」

覗き込んでくるギョロリとした目に、若干気圧されながら、ムラはツツカーに名乗る。甘い匂いのする女だ。ムラは煙草の匂いに慣れた鼻に伝わる匂いに、僅かに眉をひそめる。

「砂糖の匂いは苦手かしら？」

「こうも強いと、酔いそうね」

「……プツ、ロデイさん。貴方と同じ事言ってますよ」

「え？」

「はあ……」

ツツカーが吹き出し、ロデイが溜め息を吐く。ムラが呆けた顔で、ロデイを見る。

「まあ、私も先代に聞いた話なんですけどね」

「ツツカー、あまり無駄話をする気は無いぞ」

「はいはい、注文は白砂糖で？」

「ああ」

ツツカーが店の奥に引つ込み、ロデイが首を左右に鳴らす。年季の籠った皺と、深い傷が刻まれた顔は、老人一步手前だが、加齢による弱々しさを感ぜさせない。

煙草を喫えない為か、若干手持ちぶきたな雰囲気で、ロデイはムラに顔を向ける。

「ロデイは、ここと長いのか？」

「先代からの付き合いだ。と言つても、南のシエルターには、あまり来ていないがな」
甘い匂いが鼻につく。

どうにも、ムラはこの匂いが好きになれそうにない。

嫌いではないが、こゝも強いと、鼻に残りそうだ。

なるべく、鼻で息をしないようにしていると、ツツカーが店の奥から戻ってくる。

「はい、ご注文の白砂糖。ムラの方もおまけてます」

「ああ、済まんな」

「あと」

袋に詰めた白砂糖を検品していたロデイに、ツツカーが顔を寄せる。

「なんか、シエルターの東のマーケットから、変なクスリが流行りだしてるみたいですよ」

「そうか」

リュックに袋を詰め、ツツカーに背を向ける。

「ムラも気を付けてね。話によると、深海棲艦だか艦娘だかを材料にしてて、ものすごい効くらしいわ」

「そう。というか、私に気安くない？」

「だって、あのロデイさんの後継でしょ？ それに、ムラ可愛いから気に入っちゃった」
「あっそ」

手を振るツツカーに背を向け、店を出る。

砂糖独特の甘い、鼻に残る匂いが薄くなり、慣れた煙草と酒、人の混じった匂いが鼻に届く。

「帰るぞ」

「待ってよ」

嗅ぎ慣れた匂いに、鼻を慣らしていたムラは、先に行くロデイの背を追う。

賑わう人混みを掻き分け、二人は市場の中に消えた。

ラック ド ラック

眠りから目を覚ませば、寢床のシーツが片方捲れていた。

窓、鎧戸の隙間から射し込む光の量から見て、今は早朝といった具合だろう。

首を回すと、最低限の家具が置かれた部屋に、愛用の背囊と、その他の仕事道具に杖に偽装した槍が、ソファーに置かれている。

「……ファイリアア？」

捲れていたシーツの片方の主、ファイリアアの姿が無い。さてと、寝惚けた頭を動かし、彼女の持ち物の有無を確認する。

ナイフとカービンライフルは無い。出歩く際に、この二つを忘れる事だけは無いので、ファイリアアは今はこの部屋には居ないという事になる。

はて、首を傾げて記憶を探る。この南のシエルターに滞在してから数ヶ月、小さな仕事をこなして、日銭を稼いで、次の大きい仕事に備える日々を過ごしていた。

ロディは、度々北のシエルターから使者が来るらしく、幾らか辟易とした様子だったが、そのお陰でこうして、シエルター内で良質の宿に、無料で滞在できるので、ムラとしては感謝したい。

しかし、問題はこの部屋ではなく、フィーリアの不在である。

仕事はあるにはあるが、それは明日の予定の筈だ。しかも、それほど急ぎの仕事という訳でもない。

そうならば、一体この朝早くから、何処へ消えたのか。

下着姿のまま、ベッドに腰掛け、ベッドサイドテーブルに置いた、若干湿気た紙巻き煙草に火を点ける。

鼻につく尖った匂いの紫煙を、意地汚く吐き出し、起きてきた頭を働かせ、一つの記憶を掘り起こす。

昨夜、就寝前にフィーリアと、報酬で得た酒を酌み交わしていると、少し疲れた様子のロデイが部屋に来て、報酬代わりの煙草と酒を、フィーリアに渡して、何かを頼んでいた。

フィーリア曰く、交渉の護衛らしいが、あのロデイが護衛を頼む交渉となると、一体どんな交渉なのか。

昨夜は酒と色香で流されたが、こうなると俄然気になってくる。

煙草を灰皿に押し付け、ソファーに引つ掛けたシャツとズボンを手に取り、手早く着替える。

「……」

艦娘から人間となり、肉体も感覚も衰えたが、それでも並みの人間よりは、肉体は強く感覚は鋭い。

だから、ムラは槍を抜き音を殺して、ドアへと二歩程近寄り、防毒面を被り、また二歩ドアへと近付く。

「……鍵は、開いてるわよ」

三秒待つ。だが、返事や動きは無い。

ムラは、槍を構えつつ、ドアの正面から離れた。

間違いない、何者かがドアの向こうに居るのだが、どうにも気配がはつきりしない。

一人、のような気もするが、何故か複数人居るような、そんな不安定な気配も感じる。

さて、どうしたものかと、ムラは鎧戸の閉まったままの窓に、面倒くさそうに視線を向ける。

この部屋は三階にあり、ムラの身体能力なら、問題なく飛び降りられるが、それから逃げるにしても、南のシエルターは土地勘が無い。

追われた場合、ほぼ確実に詰む。その場合、この部屋に立て籠るのが、答えの様な気もしなくはないが、追いつめられた状況に変わりはない。

寧ろ、部屋に立て籠る方が危険だ。

ムラは足音も呼吸も殺して、窓へ向かう。鎧戸が閉まっているが、ムラの膂力なら問

題なく破れる。

荷物を片手に、いざ窓へ飛び込もうとした瞬間、けたたましい銃声が、ドアを乱暴に叩き割った。

「ムラ！」

「フイーリア?!」

チーズの様に穴だらけになったドアを、勢いよく蹴破って現れたのは、大袈裟なまでに弾薬をぶら下げた機関銃を抱えたフイーリアだった。

「あんた、私がドアの前に居たらどうすんのよ？」

「あら、ムラ。あなたがそんな間抜けする訳ないじゃない」

フイーリアがケタケタ笑いながら、そう言えば、ムラも同じようにケタケタと笑い返す。

元艦娘、命の取り合いしかなかった日常を過ごした二人に、この程度は挨拶でしかないのだろう。

ムラが湿気た煙草を唾えると、フイーリアがそれに火を点ける。そして、ムラが紫煙を吐き出すと、現状を簡単に説明し始めた。

「ムラ、現状は少し面倒よ」

「なら、順番に聞くわ」

「まず、Mr. ロデイとはぐれたけど、これは心配無用ね。次に私達三人がターゲット」
「理由は？」

「Mr. ロデイの功績と、ビジネスパートナーと見られているみたいね」

「その連中」

「飛行船、これで分かる？」

意地汚く、うんざりとした様子で、大量の紫煙を吐き出し、吸殻を床に叩き付け踏み潰す。

フィーリアが次の煙草を差し出すと、かつさらうかの様に、それを受け取りまた火を点け、紫煙を吐く。

「で？ 私達三人拉致して、何が動くって？ ただのトレーダー二人に、バンディット一人。人質の価値はゼロよゼロ」

「その辺はどうにも、今はさっさと逃げましょ」

フィーリアが空いた手を差し出し、ムラがそれを掴む。

人間なら、何かに備え付けるか、両手で抱え込むなりしないと使えない重火器でも、元戦艦娘のフィーリアなら、片手で扱える。

それに加え、ムラは勘がいい。手は一つ塞がるが、それを補って、今の戦局を生き抜く手段となる。

「フイーリア、まだ動いてるわよ」

「うわ……、これ食らって生きてるとか、何時かのアレみたいね」

「アレはそもそも当たらないわ。しかし、これ何よ?」

ムラが槍で、いまだに蠢く頭を貫きながら、フイーリアに問うが、問われたフイーリアも首を横に振るだけで、答えらしい答えは無い。

仕方がないので、刺した槍を捻り、肉を抉りながら骨を捻り折る。

人の姿はしているが、色は蒼白を通り越して白く、槍から伝わる感触も、生物というより死肉の感触に近い。

だが、黒いコートから溢れてくる液体は赤く、生臭い。

「また、面倒事かしら?」

「さあね。答えを知っている奴は知ってるわよ」

「あら、誰かしら?」

「北の総代イヴェノヴァよ」

肉から槍を引き抜き、溜め息代わりの紫煙を吐くと、ムラは宿の階段、踊り場へ続く曲がり角を指差し、フイーリアがノータイムで、機関銃の引き金を引いた。

「今回の主犯じゃないでしょうね」

「んー? でも、この機関銃、イヴェノヴァがくれたのよ」

「何かやらせる気満々じゃないの」

機関銃が破壊の雄叫びを挙げ、曲がり角に隠れていた刺客を建材ごと粉砕していく。その音を共に連れながら、二人は騒がしい早朝の外気の中へと駆け出した。